

赤田東遺跡

—吉備中枢地における集落遺跡の発掘調査報告—

2005年3月

岡山市教育委員会

題簽 水内昌康先生

『赤田東遺跡－吉備中枢地における集落遺跡の発掘調査報告－』正誤表

頁	行	誤	正
序	7	壇状積基壇	壇上積基壇
95	図199	遺物番号 <u>277</u>	遺物番号 <u>377</u>
175	11~23	V類	D型
195	18	亀山修一編	亀山行雄編



1. 弥生時代遺構面空撮
(堀家純一氏撮影)



2. 古墳時代後期遺構面
(南半)

卷頭図版 2



1. 緑釉陶器



2. 弥生時代の石器

序

岡山市域は、古代において大和に匹敵する勢力を持った地域であったとされる吉備の中心地の大半を占めています。そのため、全長が100mを越える大型古墳が10基もあり、最大規模の造山古墳は、全長が350mもあります。全国で最も大きな古墳を築いた河内の大王墓と比べても遜色ありません。また、古代寺院跡である賞田廃寺では、畿内中央でも宮殿や有力豪族の氏寺にしか使用されない凝灰岩の壇状積基壇が認められます。質・量ともに優れた遺跡が多数存在する、極めて文化的に恵まれた地域的特色を有する市といえます。

赤田東遺跡は、竜操中学校のプール及び格技場の建設に伴って発掘調査されました。調査の結果、弥生時代中期から室町時代までの集落がみつかりました。吉備の中の有力な集落であつたらしく、多数の遺物が出土いたしました。また、古墳時代後期には、鉄生産、塩生産に関わり、馬の保有もおこなっていたことが明らかになりました。これは、古代における主要な手工業生産を網羅していたことになります。吉備を支えた集落の具体像を明らかにするための大変貴重な資料になるものと期待されます。

本報告書は、以上の調査成果をまとめたものです。岡山地方の地方史研究の基本資料として多くの方々にご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査の実施および報告書の作成にあたっては、発掘調査対策委員会の諸先生方のご指導と、発掘参加者のご支援をいただきました。記して厚く御礼申し上げます。

平成17年3月31日

岡山市教育委員会

教育長 玉光源爾

例　　言

1. この報告書は、岡山市教育委員会文化財課が平成13年6月18日から平成14年5月31日にかけて岡山市立竜操中学校のプール及び格技場新築工事事業に伴う、岡山市赤田180-1の発掘調査に関するものである。
2. この報告書の作成は岡山市教育委員会が実施し、その執筆は第IV章-5と石器の観察表について西田が、それ以外は草原が担当した。
3. 遺物の実測およびトレースは西田、木村真紀（岡山市埋蔵文化財センター嘱託職員）、矢部桃子、山元尚子、和田かほりがおこなった。遺物の写真撮影は西田がおこなった。図集は草原がおこなった。
4. 報告書の作成にあたって、鉄滓の分析については㈱九州テクノリサーチ・TACセンターの大澤正己氏に依頼し、その成果を掲載している。石器の産地及び赤色顔料については岡山理科大学の白石純氏に、出土木材の樹種については京都大学の藤井裕之氏に分析をお願いし、玉稿を掲載させていただいた。
5. この報告書に用いている高度値は標準海拔高度である。
6. この報告書に用いている方位は磁北である。
7. 図2は国土交通省国土地理院発行の2万5千分の1地形図「岡山北部」と「岡山南部」を複製し、加筆したものである。
8. 遺物、実測図、写真等は岡山市教育委員会にて保管している。

目 次

第Ⅰ章	位置と環境	1
第Ⅱ章	調査の経過	10
第Ⅲ章	遺構と遺物	15
1	近世	15
2	中世	15
3	古代(8・9世紀)	25
4	古墳時代後期(6・7世紀)	39
5	弥生時代中・後期	77
6	出土土器観察表	120
7	出土石器観察表	132
第Ⅳ章	結 語	134
1	中世(12世紀末~15世紀)	134
2	古代(8世紀~9世紀)	137
(1)	遺構の変遷	137
(2)	遺跡の性格	140
(3)	郷衛との関係について	141
3	古墳時代後期	146
(1)	遺構変遷の基準	146
(2)	赤田東遺跡の古墳時代後期の遺構の変遷	153
(3)	吉備地域における5~7世紀の集落遺跡の変遷と画期	155
4	弥生時代中・後期の遺構	179
5	石器	182
附 章		
1	赤田東遺跡出土サヌカイト製石槍の石材産地について	196
2	柱痕の樹種について	198
3	赤田東遺跡と津島江道遺跡出土鉄関連遺物(製鍊滓・鍛造剥片) の金属的調査	203

挿入図目次

図1	赤田東遺跡の位置	1	図46	柱穴列1実測図	33
図2	周辺道路分布図	2	図47	柱穴列2実測図	33
図3	岡崎隆司氏採集石獣	4	図48	柱穴列3実測図	33
図4	岡崎隆司氏採集土器	6	図49	柱穴列4実測図	34
図5	赤田東遺跡調査区南側湖中出土土器	7	図50	柱穴列5実測図	34
図6	調査区位置図	11	図51	柱穴列6実測図	34
図7	調査区域図	12	図52	柱穴列7実測図	34
図8	土層断面図	13	図53	柱穴列8実測図	34
図9	近世水田層出土遺物(1)	15	図54	P669実測図	35
図10	近世水田層出土遺物(2)	15	図55	P669出土遺物	35
図11	近世遺構配置図	16	図56	P718実測図	35
図12	中世遺構配置図	17	図57	P718出土遺物	36
図13	建物1実測図	18	図58	P769実測図	36
図14	建物2実測図	18	図59	P769出土遺物	37
図15	建物3実測図	18	図60	集石遺構1実測図	37
図16	建物4実測図	19	図61	溝2実測図	37
図17	柱穴列1実測図	19	図62	溝2出土遺物	38
図18	柱穴列2実測図	19	図63	古代包含層出土遺物(1)	38
図19	柱穴列3実測図	19	図64	古代包含層出土遺物(2)	39
図20	柱穴列4実測図	19	図65	古代包含層出土遺物(3)	39
図21	柱穴列5実測図	20	図66	古代遺構面上出土遺物(1)	39
図22	柱穴列6実測図	20	図67	古代遺構面上出土遺物(2)	39
図23	柱穴列7実測図	20	図68	古墳時代後期(6・7世紀)遺構面	40
図24	柱穴列8実測図	21	図69	豎穴住居1a実測図	41
図25	柱穴列9実測図	21	図70	豎穴住居1b実測図	41
図26	井戸1実測図	21	図71	豎穴住居1a出土遺物	42
図27	井戸1出土遺物	22	図72	豎穴住居1b出土遺物	42
図28	井戸2出土遺物(1)	22	図73	豎穴住居2a実測図	42
図29	井戸2実測図	23	図74	豎穴住居2a出土遺物	43
図30	井戸2出土遺物(2)	24	図75	豎穴住居2b実測図	43
図31	墓1実測図	24	図76	豎穴住居2c実測図	43
図32	墓2実測図	25	図77	豎穴住居2a・b・c出土遺物	44
図33	古代(8・9世紀)遺構配置図	26	図78	豎穴住居3実測図	45
図34	建物1実測図	27	図79	豎穴住居3出土遺物(1)	45
図35	建物1出土遺物	27	図80	豎穴住居3出土遺物(2)	46
図36	建物2実測図	28	図81	豎穴住居7実測図	47
図37	建物3実測図	28	図82	豎穴住居7出土遺物(1)	47
図38	建物4実測図	29	図83	豎穴住居7出土遺物(2)	47
図39	建物5出土遺物	29	図84	豎穴住居8実測図	48
図40	建物5実測図	30	図85	豎穴住居8出土遺物	48
図41	建物6実測図	30	図86	豎穴住居9実測図	48
図42	建物6出土遺物	31	図87	豎穴住居9出土遺物(1)	48
図43	建物7実測図	31	図88	豎穴住居9出土遺物(2)	48
図44	建物8実測図	32	図89	豎穴住居11実測図	49
図45	建物9実測図	32	図90	豎穴住居11出土遺物	49

图91	竖穴住居16实测图	50	图138	P 1439出土遗物	66
图92	竖穴住居16出土遗物	50	图139	P 1447实测图	67
图93	竖穴住居18实测图	51	图140	P 1447出土遗物	67
图94	竖穴住居18出土遗物	51	图141	P 1666实测图	67
图95	竖穴住居19实测图	52	图142	P 1666出土遗物	67
图96	竖穴住居19出土遗物	52	图143	古墳時代後期溝断面図	68
图97	竖穴住居20实测图	53	图144	溝3出土遺物	68
图98	竖穴住居20出土遗物	53	图145	溝9出土遺物	68
图99	竖穴住居21实测图	54	图146	溝10出土遺物(1)	70
图100	竖穴住居21出土遗物	54	图147	溝10出土遺物(2)	71
图101	竖穴住居22实测图	54	图148	溝11出土遺物	72
图102	竖穴住居22出土遗物	54	图149	溝12出土遺物(1)	73
图103	建物1実測図	55	图150	溝12出土遺物(2)	74
图104	建物2実測図	55	图151	溝13出土遺物	75
图105	建物3実測図	56	图152	溝15出土遺物	75
图106	建物4実測図	56	图153	包含層出土遺物(2)	75
图107	建物5実測図	57	图154	包含層出土遺物(1)	75
图108	建物6実測図	57	图155	包含層出土遺物(3)	75
图109	建物7実測図	58	图156	包含層出土遺物(4)	76
图110	建物8実測図	58	图157	竖穴住居4実測図	77
图111	建物9出土遺物(1)	58	图158	弥生時代中・後期造構面	78
图112	建物9出土遺物(2)	58	图159	竖穴住居4出土遺物(1)	79
图113	建物9実測図	59	图160	竖穴住居4出土遺物(2)	80
图114	建物10実測図	59	图161	竖穴住居5出土遺物(1)	80
图115	建物11実測図	60	图162	竖穴住居5出土遺物(2)	81
图116	建物12実測図	60	图163	竖穴住居5実測図	82
图117	建物13実測図	61	图164	竖穴住居6実測図	82
图118	柱穴列1実測図	61	图165	竖穴住居6出土遺物	83
图119	柱穴列2実測図	61	图166	竖穴住居10実測図	83
图120	柱穴列3実測図	61	图167	竖穴住居10出土遺物(1)	83
图121	柱穴列4実測図	62	图168	竖穴住居10出土遺物(2)	84
图122	柱穴列5実測図	62	图169	竖穴住居12実測図	84
图123	柱穴列6実測図	62	图170	竖穴住居13実測図	84
图124	柱穴列6出土遺物	62	图171	竖穴住居12・13・14出土遺物(1)	85
图125	柱穴列7実測図	62	图172	竖穴住居14実測図	86
图126	柱穴列8実測図	62	图173	竖穴住居14出土遺物	86
图127	柱穴列9実測図	63	图174	竖穴住居12・13・14出土遺物(2)	87
图128	橋状造構実測図	63	图175	竖穴住居15実測図(1)	87
图129	P 1110実測図	64	图176	竖穴住居15実測図(2)	88
图130	P 1110出土遺物	64	图177	竖穴住居15出土遺物(1)	89
图131	P 1209出土遺物	64	图178	竖穴住居15出土遺物(2)	89
图132	P 1209実測図	65	图179	竖穴住居15出土遺物(3)	90
图133	P 1395実測図	65	图180	竖穴住居17実測図	90
图134	P 1395出土遺物	65	图181	竖穴住居23実測図	90
图135	P 1406実測図	66	图182	竖穴住居24実測図	90
图136	P 1406出土遺物	66			
图137	P 1439実測図	66			

図183	豎穴住居24出土遺物	91	図230	溝16出土遺物(3)	108
図184	豎穴住居25実測図	91	図231	溝17出土遺物(1)	109
図185	豎穴住居25出土遺物(1)	92	図232	溝17出土遺物(2)	110
図186	豎穴住居25出土遺物(2)	92	図233	溝17出土遺物(3)	111
図187	建物1実測図	92	図234	溝18出土遺物(1)	111
図188	建物1出土遺物	93	図235	溝18出土遺物(2)	112
図189	P1036実測図	93	図236	溝18出土遺物(2)	113
図190	P1036出土遺物(1)	93	図237	溝19出土遺物(1)	113
図191	P1036出土遺物(2)	93	図238	溝19出土遺物(2)	114
図192	P1058実測図	93	図239	溝20出土遺物	114
図193	P1058出土遺物	94	図240	溝21出土遺物(1)	115
図194	P1073実測図	94	図241	溝21出土遺物(2)	116
図195	P1073出土遺物	94	図242	溝22出土遺物	116
図196	P1101・P1102実測図	95	図243	包含層及び柱穴出土石器(1)	117
図197	P1101出土遺物	95	図244	包含層及び柱穴出土石器(2)	118
図198	P1107実測図	95	図245	包含層及び柱穴出土石器(3)	119
図199	P1107出土遺物(1)	95	図246	赤田東遺跡中世遺構変遷図	136
図200	P1107出土遺物(2)	95	図247	赤田東遺跡古代遺構面出土土器分類	137
図201	P1108出土遺物(1)	96	図248	赤田東遺跡古代遺構変遷図	138
図202	P1108実測図	97	図249	久田原遺跡古代遺構	142
図203	P1108出土遺物(2)	97	図250	小中遺跡古代遺構	143
図204	P1109実測図	98	図251	城山東遺跡古代遺構	144
図205	P1109出土遺物	98	図252	赤田東遺跡関門須恵器の変遷	147・148
図206	P1120実測図	98	図253	杯の変遷	149
図207	P1120出土遺物	99	図254	福吉丸山遺跡段状遺構5出土土器	150
図208	P1126実測図	99	図255	矢部36号墳出土土器	151
図209	P1126出土遺物	100	図256	千引7号墳出土土器	151
図210	P1253実測図	100	図257	矢部37号墳出土土器	152
図211	P1253出土遺物	100	図258	富原西奥古墳出土土器	152
図212	P1269実測図	101	図259	赤田東遺跡古墳時代後期遺構変遷図	154
図213	P1269出土遺物	101	図260	5～6世紀初頭の集落(1)	156
図214	P1658実測図	101	図261	5～6世紀初頭の集落(2)	158
図215	P1658出土遺物(1)	101	図262	5～6世紀初頭の集落(3)	159
図216	P1658出土遺物(2)	101	図263	5～6世紀初頭の集落(4)	160
図217	P1669出土遺物	102	図264	6世紀中葉の集落	163
図218	P1669実測図	102	図265	6世紀後葉～7世紀初頭の集落(1)	165
図219	P1692実測図	102	図266	6世紀後葉～7世紀初頭の集落(2)	167
図220	P1692出土遺物	102	図267	5世紀前半～7世紀初頭の集落形態	168
図221	P1720実測図	103	図268	鉄・鉄器生産関連集落	170
図222	P1720出土遺物(1)	103	図269	7世紀前葉の集落	172
図223	P1720出土遺物(2)	104	図270	百間川今谷遺跡弥生時代中期遺構	181
図224	P1734実測図	105	図271	百間川今谷遺跡弥生時代中期壙立柱建物の復原	181
図225	P1734出土遺物	105	図272	赤田東遺跡の石器組成	184
図226	P1737実測図	105	図273	接合資料2	186
図227	P1737出土遺物	105	図274	岡山西南部地域石器石材別の数量と重量	189
図228	溝16出土遺物(1)	106	図275	大型原材・普段の墓塚地からの距離と重量分布	190
図229	溝16出土遺物(2)	107	図276	石包丁のサスカイト利用率と原産地からの距離	192

図版目次

巻頭図版1

1. 弥生時代遺構面空撮(服家純一氏撮影)
2. 古墳時代後期遺構面(南半)

巻頭図版2

1. 緑釉陶器
2. 弥生時代の石器

図版1

1. 中世遺構面(西から)
2. 中世遺構面(北から)
3. 墓2

図版2

1. 井戸1(断面)
2. 井戸1
3. 井戸2

図版3

1. 古代遺構面(東から)
2. 古代遺構面(西から)
3. 古代遺構面(北から)

図版4

1. 建物1・建物6
2. 建物2・建物3・建物5(西から)
3. 建物2・建物3・建物5(北から)

図版5

1. 建物8
2. 建物6
3. 建物4

図版6

1. 建物2
2. 建物5
3. 建物3

図版7

1. 壁穴住居1
2. 壁穴住居2
3. 壁穴住居3

図版8

1. 壁穴住居9
2. 壁穴住居9、馬骨出土状況
3. 壁穴住居7・8

図版9

1. 壁穴住居11
2. 壁穴住居16
3. 壁穴住居18

図版10

1. 壁穴住居19
2. 壁穴住居20
3. 建物1・2

図版11

1. 建物4
2. 建物5
3. 建物6

図版12

1. 建物7
2. 建物10
3. 建物13

図版13

1. 建物2柱根出土状況
2. 建物9礫板出土状況
3. 溝10断面

図版14

1. 古墳時代後期遺構面(西から)
2. 古墳時代後期遺構面(西から)
3. 溝10・11・12合流点付近

図版15

1. 溝10犬骨出土状況
2. 溝13馬骨出土状況
3. 溝10発掘状況

図版16

1. 溝3馬骨出土状況
2. P1209断面
3. P1209馬骨出土状況

図版17	3. 229
1. P1406	4. 251
2. P1439	5. 265
3. P1666	6. 270

図版18	図版26
1. 弥生時代遺構面(西から)	1. 180
2. 墓穴住居4	2. 284
3. 墓穴住居5	3. B1・2・3・4
	4. D1

図版19	図版27
1. 墓穴住居5 PB遺物出土状況	1. 299
2. 墓穴住居6	2. 316
3. 墓穴住居10	3. 293
	4. 302

図版20	図版28
1. 墓穴住居12・13・14	1. 295
2. 墓穴住居12・13・14	2. 344
3. 墓穴住居15	3. D1・D2
	4. 430

図版21	図版29
1. 墓穴住居15	1. 381
2. 墓穴住居24	2. 480
3. 建物1	3. 523
	4. 501
	5. 476

図版23	図版29
1. P1108	1. 381
2. P1720	2. 480
3. 濁17遺物出土状況	3. 523
	4. 501
	5. 476

図版24	1. 46
	2. 47
	3. 40
	4. 249・250
	5. 調査区南側より表採
	6. 91
	7. 118

図版25	1. 110
	2. 282

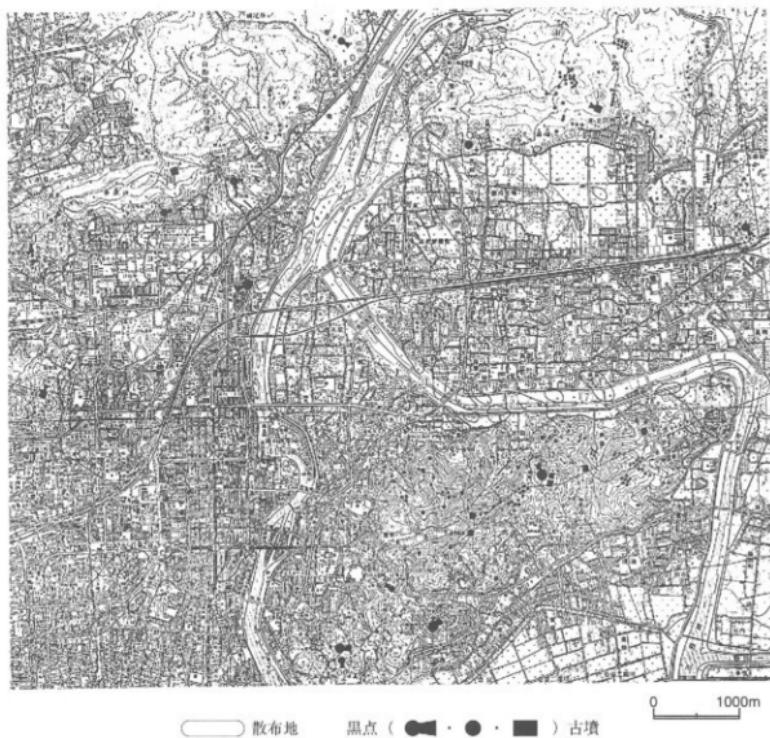
第Ⅰ章 位置と環境

赤田東遺跡は岡山平野の中央部に位置する。そこは高梁川・吉井川とともに岡山三大河川の1つである旭川の東岸平野の北半になる。岡山平野の水田耕地は現在25000haであるが、そのうち20000haまでが近世を中心開発された干拓によって生み出されたものである。岡山市街地の南から児島湖にかけて広がる広大な水田地帯は、中世までは瀬戸内海へ続く内海で、古代には「吉備穴海」と呼ばれていた。今でこそ旭川両岸平野は、岡山平野北半のやや山寄りに近い印象を受けるが、近世以前はまさに岡山平野の中心であった。周囲の水田地割りには正方位の条里地割りが残り、古くから開発がおこなわれたことがうかがえる。赤田東遺跡のある岡山市赤田は、明治21年に、閑・藤原・沢田、高屋・兼基、今谷、清水の7ヶ村と合併して幡多村となり、翌年市町村制の施行に伴い大字赤田となった。そして、昭和29年に岡山市へ編入合併された。新幹線が開通した直後は、水田の方がかなり目立っていたが、現在は宅地化がすすみ、都市的な景観へと変貌をとげつつある。

中国地方を山陽と山陰の南北に分ける中国山地は海拔1000~1100mの山々がそびえ、その南には海拔300~600mの典型的な隆起準平原である吉備高原が沿岸部の平野まで続く。旭川は中国山地西南部に源を発する大河川で、吉備高原を削り、海拔257mの吉備高原の南端である竜ノ口山と、標高499.5mの金山山塊の間から平野部へ流れ出る。支流である新庄川、備中川、宇甘川などを合わせての流域面積は約1600km²である。現在は岡山市江並で児島湾に流入しているが、かつては繩文海進により生じた内海である吉備穴海に注いでいた。繩文海進や沖積地の形成環境についての基礎データに関しては、岡山城三之曲輪の発掘調査(秉周1990)では繩文海進期の汀線を示すと考えられる波蝕台が確認された。また、岡山城二之丸跡や南方釜田遺跡の発掘調査では繩文海進期の浅海の海底にある生痕内で赤ホヤ火山灰(B.P. 6~6.54千年)や、さらにその下方で一次的な堆積とみられるA T火山灰(B.P. 2.1~2.23万年)が確認されている(扇崎1989)。



図1 赤田東遺跡の位置



- | | | | | | |
|-----------|-------------|-----------|------------|-----------|----------|
| ① 朝夜暮貝塚 | ⑨ 赤田東遺跡 | ⑩ 津倉古墳 | ㉖ 金蔵山古墳 | ㉗ 鮎多魔寺 | ㉘ ハガ遺跡 |
| ② 津島岡大遺跡 | ㉙ 庭田遺跡 | ㉚ 備前車塚古墳 | ㉛ 一本松古墳 | ㉜ 居都魔寺 | ㉝ 雄町遺跡 |
| ㉞ 津島江道遺跡 | ㉟ 都月坂2号墳丘墓 | ㉟ 網浜茶臼山古墳 | ㉟ 佐木あづか衛古墳 | ㉟ 網ノ浜廃寺 | ㉟ 新道遺跡 |
| ㉞ 津島遺跡 | ㉞ 南国長遺跡 | ㉞ 操山109号墳 | ㉞ 旗振台古墳 | ㉞ 唐人塚古墳 | ㉞ 岡山城 |
| ㉞ 百間川沢田遺跡 | ㉞ 中井南・三沢田遺跡 | ㉞ 操山103号墳 | ㉞ 操山21号墳 | ㉞ 沢田大塚古墳 | ㉞ 龍ノ口山古墳 |
| ㉞ 南方遺跡群 | ㉞ 片山古墳 | ㉞ 山王山古墳 | ㉞ 上の山古墳 | ㉞ 備前国寄進定地 | ㉞ 能ノ口城 |
| ㉞ 百間川兼基遺跡 | ㉞ 七つ塚古墳群 | ㉞ 神宮寺山古墳 | ㉞ 百間川尾島遺跡 | ㉞ 百間川米田遺跡 | |
| ㉞ 乙多見遺跡 | ㉞ 都月坂1号墳 | ㉞ 清茶白山古墳 | ㉞ 貴田魔寺 | ㉞ 南古市場遺跡 | |

図2 周辺遺跡分布図

遺跡(山本¹⁹⁹²)でも同じ様相である。また旭西平野の北端、まだ平野が形成される以前の遺跡であるが、朝寝鼻貝塚からは前期の頃のプラントオーパールが検出され(富岡¹⁹⁹⁸)、コメ栽培の起源をめぐる新たな資料を提供している。ただ県南部の縄紋時代の遺跡の動向をみると、後期において遺跡数が増加する傾向があり、この点と生業活動との関係が注目される。かなり古くからコメ作りをおこなっていることを示す資料が提示されたことからも、コメ栽培の開始と水田稲作の開始は異なった歴史的意味があると考えられる。水田稲作は水田を開発し、維持することによって広域の集団関係を形成し、それが現代まで続く列島社会の基盤であることからも、縄紋時代のコメ栽培とは区別される。最も古い水田遺構は津島江道遺跡(神谷¹⁹⁸⁸)で検出された微地形に即した小区画水田遺構である。出土した土器は突尖紋土器で、小型の石鍬も伴っている。水田耕作に石鍬が伴っている例としては、静岡県宮竹野際遺跡(太田¹⁹⁸⁴)の小区画水田から出土した例があり、岡山県南部の沖積地の遺跡からも石鍬が出土した例がいくつもあることから、石鍬で水田を耕作していた可能性は高い。ただ突尖紋期の集落遺跡の様相が明確でなく、弥生時代前期初頭のような拠点集落が出現していたかどうかについては今のところ明らかではない。

弥生時代前期初頭には旭西平野では津島遺跡(正岡²⁰⁰⁰)が、やや遅れて旭東平野では百間川沢田遺跡が形成される。津島遺跡は県下最古の拠点集落であり、出土した土器の成形技法から最古の遠賀川式土器とする見方もある(家根¹⁹⁸⁷)。百間川沢田遺跡は東西85m、南北100mの環濠集落で内部には竪穴住居や木棺墓がある。環濠内縁部は遺構の認められない空白部分で、環濠埋土上に内部から崩落した上層が認められることから、内側に土塁がめぐっていたことも推測される。やや時期は降る前期中葉から後葉の環濠集落が矢掛町清水谷遺跡(藤江²⁰⁰²)で明らかになっている。この環濠集落の内側では竪穴住居と小溝や柱穴が検出されているが、墓や土塁は認められない。完全にめぐらぬものの欄列等の遮断施設はあったようである。今のところ県下では前期の環濠集落は2例だけであるが、両遺跡とも環濠集落といった範疇では共通するものの、その構造や時期はかなり個性があることがうかがわれる。前期の水田は、古くから指摘されていた津島遺跡の河道の肩部分に形成された漫田タイプと、微高地縁辺あるいは微高地低位部の乾田・半乾田タイプの二者がある。現況では後者の水田例が多く、当時も主体であったと考えられる。津島江道遺跡の水田も後者の水田である。

弥生時代中期になると、旭西平野の中央には南方遺跡群(出宮¹⁹⁷¹)が形成される。前期の遺構や遺物が検出されていることから、前期の段階でも集落域であったが、中期中葉になると爆発的に遺構・遺物が認められるようになり、しかも径1~1.5kmの範囲の複数の微高地が同じ様相となる。集落景観は各微高地を全面調査した例がなく細部にわたっては明確にできないが、断片的な調査例から、1つの微高地は居住域と墓域で構成されており、しかも微高地間には格差が認められないことから、構造的には微高地を1つの単位とする等質的な集落が集合していたという様相であったと考えられる。このような集落構造が、当地の中期における拠点集落の大まかな景観であったと推測される。南方遺跡の発掘調査では多量の土器や石器とともに極めて精巧な木製品が多数出土しており、当時の木工技術の高さをうかがい知ることができる。旭東平野でも百間川兼基遺跡(高畠¹⁹⁸²)から大型掘立柱建物群、隣接する乙多見遺跡(正岡¹⁹⁸⁹)からは河内産の土器が出土し、赤田東遺跡からもまとまった遺構が検出されている。旭西平野と同様に拠点集落が形成されていた可能性が高い。

中期末になると、南方遺跡群は一部に遺構が認められる微高地があるものの、総体的には遺構や

遺物が認められなくなる。一方、津島遺跡や鹿田遺跡(山本^{et al.}1988)など周辺に新たな集落が形成される。中期末には南方遺跡群は解体したと考えられる。旭東平野についても赤田遺跡などの新たな集落が認められることから、集落域などに変化があった可能性が高い。龍ノ口山塊からは、大型の石鏡や土器片が採集されており(図3)、該期によく見受けられる、いわゆる高地性集落が存在しているといえ、児島半島(旧児島)などの動きとも連動しているとも考えられる。

弥生時代後期は、大小の遺跡が各所に認められる。岡山市域西端の足守川流域では特定集団墓・特定個人墓である墳丘墓の発達が顕著で、供獻に用いた壺・器台が大型化した特殊器台・壺を伴っているものもある。特殊器台・壺は出雲地域の首長墓からも出土しており、地域を越えた首長間の政治的交流に用いられている。ただし山間の集団墓から出土する例もあり、それ自体が序列を明示していたわけではなさそうである。旭西平野でも墳長が約20m×19mの都月坂2号墓(近藤1986)があるものの、後の古墳時代前期初頭の前方後円(方)墳の数からすると少ない印象が強い。平野部の遺跡である備前国府推定地(南国長)遺跡(河田1998)からは特殊器台・壺が出土した土壤(墓?)が検出されており、墳丘墓自体も平野部に存在していた可能性もあると思われる。時期は異なるが、備前国府推定地(南国長)遺跡の南側の平野部から、墳丘を削平された古墳群(桑田1994)も調査されている。

後期になると広範囲で洪水砂に埋もれた水田が検出される。当時の水田システムをそのまま保存した極めて良好な遺構であるが、当時としては生産域の大半を失うという社会的には壊滅的な大打撃であったと推測される。しかし、直後の古墳時代前期初頭には周囲の山塊に数多くの古墳が築かれており、この洪水との関係を指摘する考え方(下澤2000)もある。

古墳、とりわけ前期の前方後円(方)墳の築成の特徴を検討する上で、旭東・旭西平野は極めて良好な資料を提供している。平野を囲む山塊に古墳が位置していることから、それら古墳の築造母体が両平野部であり、1つの単位地域のなかの古墳と仮定できる。具体的な築成状況を見てみると、旭西平野では特殊器台形埴輪を伴うか、もしくは伴う時期である可能性のある前期初頭の前方後円墳は5基あり、それらの分布から3つのグループに分けられる。Aグループは墳長55mの前方後円墳の片山古墳である。Bグループは墳長45mの前方後方墳の七つ塹1号墳、墳長25mの前方後方墳の七つ塹5号墳(近藤1987)、墳長33mの前方後方墳の都月坂1号墳(近藤1986)の3基である。Cグループは墳長33mの前方後方墳の津倉古墳である。旭東平野では2つのグループに分けられる。Dグループは墳長48mの前方後方墳の備前車塚古墳(近藤1986)、Eグループは墳長92mの前方後円墳の網ノ浜茶臼山古墳(宇垣1988)、墳長74mの前方後円墳の操山109号墳(宇垣1988)、墳長34mの操山103号墳(草原2002)である。

その後、A・Cグループは継続する前方後円(方)墳ではなく、Dグループも墳長68.5mの山王山古墳以降は見当らない。山王山古墳は測量調査の結果、前期初頭の前方後円墳の特徴の1つである前方部が撥形に広い形態とされているが、採集されている埴輪は受口状の特徴はあるものの、文様が喪失した普通円筒埴輪や壺形埴輪である(宇垣1988)。当地では、撥形の前方部は少し時期幅があることを示している。したがって、埴輪が採取されていないか、もしくは伴っていない可能性のある

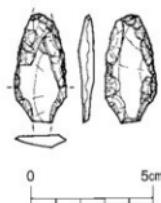


図3 岡鶴隆司氏採集石鏡
(図2の西麓)

操山103号墳、津倉古墳、七つ塙5号墳、片山古墳などは若干時期が降る可能性もある。いずれにせよ、A・C・Dグループは前期初頭前後には前方後円(方)墳の築成はなくなる。Bグループには前期中葉になると墳長約150mの前方後円墳の神宮寺山古墳(鎌木1962)、Eグループには墳長約120mの前方後円墳の湊茶臼山古墳(近藤1986)が築かれる。旭川両岸の複数のグループがそれぞれBとEのグループに集約され、全長100mを越える大形古墳が出現したと考えられる。その後、前期後葉になると、Bグループには前方後円墳はなくなり、Eグループのみが墳長165mの金蔵山古墳(鎌木1959)を築く。ただし、中期初頭になるとどのグループも前方後円墳を築かない。つまり、前方後円(方)墳の系譜が途切れるのである。

参考までに、奈良県の大和盆地における古墳の築成状況を見てみたい。前期の前方後円(方)墳だけに限っても、数が膨大であり、詳細を把握するのは不可能に近いほど困難であるため、墳長200m前後を越える巨大古墳についての動向に限定してみてみたい。大和盆地ではA～Eの5グループが認められる。Aグループは盆地南東部で箸墓古墳→西殿塚古墳→行燈山古墳→渋谷向山古墳で、前期初頭から後葉まで継起的に築かれる。Bグループは盆地南部で、桜井茶臼山古墳→メスリ山古墳が前期初頭から中葉まで築かれる。Cグループは前期中葉から盆地北部で五社神古墳→宝来山古墳が築かれ、中期以降にも築かれていく。Dグループは前期後葉に盆地南部の巣山古墳が築かれ、中期以降にも築かれていく。Eグループは前期後葉に盆地西部の鳥ノ山古墳が築かれ、中期以降にも築かれていく。Aグループには墳長が100mを越える古墳がいくつもあり、渋谷向山古墳以降に位置づけられる古墳もあるかもしれないが、墳長200mを越える巨大古墳の系譜は途切れたといえる。以上のように、それぞれのグループの古墳の築成動向はまちまちであり、基本的には各グループの集団関係を反映させていると考えられる。これは古墳の規模は異なるが、旭西・旭東平野の状況と共通すると考えられる。古墳の築成について、畿内中央からの規制が及んだという意見(小野山1975)や、築成状況の変動が列島規模で共通するといった意見(都出1991)もあるが、旭西・旭東平野と大和盆地だけを見ても、個別的で不安定な築成をしていることが看取される。それは前期から中期にかけての古墳の築成をみる限り、規模などの量以上の差が、後の畿内中央と呼ばれる地域と地方との間にあったとは思われないのである。いずれにせよ旭西・旭東平野は古墳時代を考えるための良好なフィールドといえる。

中期後半になると、旭西平野では墳長65mの前方後円墳の一本松古墳(近藤1986)、塚の本(おつか様)古墳(近藤1988)が築かれる。旭東平野では前方後円墳は築かれないが、一辺27mの旗振台古墳(鎌木1962)に代表されるように、比較的規模の大きな方墳が築かれる。また金蔵山古墳の谷を挟んだ西側尾根上にある径20mほどの円墳である操山21号墳からは、川西編年(川西1978)Ⅳ期と推定される埴輪片(草原2004)が採集されている。旭東平野北側の山裾部でも、もう少し小規模である上の山古墳(出宮1974)などがある。おそらく中期初頭以降、20m前後規模の方墳や円墳が旭東平野における首長墓として複数築かれているのだと思われる。一方こういった山塊上に築かれた古墳のはかに、平野部でも古墳群が形成されている。それは中井・南三反田遺跡で、一辺もしくは径12m前後の小墳が10基以上まとめて築かれている(桑田1994)。墳丘は削平されており周溝のみが残るが、埴輪は出土していない。古墳群の全貌は明らかではないが、山塊上の古墳に比べると規模も小さいものが主体で、埴輪も持っていないことから、平野部の古墳はより下位クラスの古墳であった公算が大きい。

古墳時代の集落は旭西平野では津島江道遺跡(草原1998)、津島遺跡(正岡₁₉₉₀)、鹿田遺跡(山本₁₉₈₈)、旭東平野では百間川原尾島遺跡(宇垣₁₉₉₉)、同沢田遺跡(平井₁₉₉₃)、同兼基遺跡(高畑₁₉₈₂)、赤田東遺跡などがある。いずれの集落遺跡も6世紀末までは竪穴住居が主体であるが、百間川兼基遺跡では5世紀の時期で、しかも規模の大きな総柱建物が棟方向を合わせて並んで検出された。また竪穴住居もあるが、それらは総柱建物と重複しているものもあることから、竪穴住居と総柱建物は時期的に分離できる可能性が高い。そうすると総柱建物は倉庫群として独立して存在していたといえる。該期の規模の大きな倉庫群は大阪府法円坂遺跡や、和歌山県鳴滝遺跡などの例があり、百間川兼基遺跡の倉庫群は、以上の2遺跡ほどの規模はないものの、それらに準ずるものといえる。付近に首長層の居宅があるのか、もしくは屯倉の前身となるような遺跡であるかもしない。原尾島遺跡では滑石製玉類の未製品が出土しており、5世紀後半から末に当地の集落の中には玉作りをおこなっているものがあったことを示している。また製鉄遺跡にしても、一本松古墳に鉄槌や鉄錐などが副葬されていることから、中期段階でも存在していた可能性が高いが、今のところ集落遺跡からは検出されていない。おそらく中期は一本松古墳クラスの首長に直接的に掌握されていたと思われる。6世紀後半になると製鉄関連の遺物や、造構が認められる集落が多くなる。津島江道遺跡では鍛冶炉や鉄滓、鉄製品が出土しており、遺跡背後にあるダイミ山を北へ越えた笹ヶ瀬川流域の小単位平野周辺の丘陵には、多数の後期古墳がある。また、大規模な製錬遺跡(乗岡₁₉₉₁)もみつかっており、付近の丘陵部では鉄滓も散布していることから、まだまだ多くの製錬遺跡が埋没している可能性が高い。一方、笹ヶ瀬川流域の平野は面積も狭く、発掘調査によっても安定した平野とは言い難い(伊藤₁₉₉₉)。数多くの後期古墳の母体となる平野とは考えにくいのである。おそらく旭西平野の墓域でもあったと考え方が妥当であろう。そして、鉄生産についても、笹ヶ瀬川流域で製錬をおこない、旭西平野で鍛冶をおこなうといった地域的な分業システムも想定される。赤田東遺跡では6世紀後半~9世紀まで継続する集落が調査されており、竪穴住居から掘立柱建物へ6世紀末~7世紀初頭に変わることが確認された。県下では百間川原尾島遺跡、倉敷市矢部遺跡(江見₁₉₉₅)で7世紀初頭の掘立柱建物で構成される集落が検出されており、少なくとも県南部における集落の一般的な様相であった可能性が高い。

飛鳥・奈良時代になると、旭東平野には賞田廃寺(出宮₁₉₉₅)・幡多廃寺(出宮₁₉₇₅)・居都廃寺・網ノ浜廃寺などの古代寺院が集中する。一方、旭西平野には古代寺院は認められない。わずかに旭西平野に北接する笹ヶ瀬川流域で津高北廃寺(伊藤₁₉₈₆)がある。笹ヶ瀬川流域は古代の津高郡で、旭西平野が三野郡であり郡域が異なっている。しかし『津高郡完巻』(774~777年)に津高郡の小領として、三野臣の名がみえることや、津高を冠した氏名の氏族が検出できないことから、三野郡と津高郡は旭西平野を基盤とした古代豪族である三野氏の領域と考えられている(吉田₁₉₉₀)。したがって津高北廃寺も旭西平野の古代寺院といえる。とはいって、旭東平野の寺院数と比べると劣勢は否めない。このような差は古墳時代後期から認められる。いわゆる巨石を用いた大型石室を構築している巨石墳は唐人塚古墳(草原₂₀₀₁)や、沢田大塚古墳(岡山理科大学学友会考古学部₁₉₇₀)など、旭東平野には認められるが、旭西平野ではなく、操山山塊や竜ノ口山塊には群集墳が形成されているものの、笹ヶ瀬川流域を含めた旭西平野でも

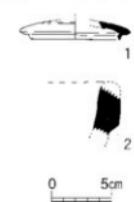


図4 岡崎隆司氏採集土器

群集墳まで古墳を集中して築いた古墳群は認められない。竜ノ口山塊両側にある竜ノ口1号墳は全長6m前後の横穴式石室で、古くに盗掘にあつたらしく開口している。開口部には盗掘の際の排土が認められ、その中から長頸壺の蓋(図4-1)が採集されている。

奈良時代になると、旭東平野を基盤とする古代豪族である上道氏が朝臣を下賜され、しかも上道朝臣斐太郎のように中央政界で官人化していくのは、そういった基盤が以前から形成されていたことを示している。三野氏は朝臣も下賜されていない。備前国府も旭東平野に想定されており、それも両平野を基盤とする勢力の状況を反映させているものと思われる。官衙遺跡は、旭西平野では津島江道遺跡で、奈良時代の縦柱建物がまとまって検出されており、御野郡衙に伴う倉院である可能性も推測されている(岡田1992)。しかし、隣接する発掘調査区の成果と整合させてみても、それ程大規模ではない(草原1998)。延暦一四年(795)に規定された郷倉に相当することも考えられる。旭東平野では「市」を墨書きした土器が出土したり、縦柱建物がまとまって検出された米田遺跡(物部2002)が備前国府の国府津に推定され、雄町遺跡は方八町城の備前国府の南限に推測されている(高橋1969)。ハガ遺跡では、備前国府中枢部の一端が明らかとなった(草原2004)。南古市場遺跡で、河道と掘立柱建物が検出され、河道からは杯・皿などの土師器食膳具が大量に出土し、なかには越州窯青磁の輪花皿も含まれており、貴田廃寺所用の軒平瓦も出土したことから、備前国府に関連する遺跡と考えられる⁽¹⁾。このほか綠釉陶器や灰釉陶器は出土した遺跡もあるが、いずれも一般的な集落からも出土しており、断片的な発掘では官衙であるかどうかを決めるることは難しい。今回発掘調査された調査区の南側の東西道路を挟んだ畑で、ゴミ穴を掘削した際に現地表下15cmのところで包含層が露出し、そこから多くの遺物が出土した。図化できたのは(図5)、須恵器杯蓋・薬壺土器・甕・土師器丹塗り面取りのある高杯などで、弥生中期の土器片も認められる。包含層の厚さや基盤層の高さなどは、掘削深度が浅かったため確認できなかったが、遺構・遺物の濃密な状況が調査区外へも広がっていることを示す証拠となる。

平安時代以降も数多くの遺跡が旭西・旭東平野には形成されている。百間川米田遺跡(物部2002)などは橋梁遺構、鹿山遺跡(山本・1988)や新道遺跡(草原2002)では殿下渡領である鹿田庄関連の遺構や遺物が発掘調査されている。とくに、新道遺跡からは、12世紀末の時期の井戸から庄園関連のことを記した木簡が出土しており、該期の鹿田庄の中心施設が付近に存在する可能性がある。早くから市街地化がすんだ鹿田庄城ではあるが、発掘調査の進展により、序々にその内容が明らかになってきている。

戦国時代になると大・小の山城が築かれており、赤田東遺跡の近辺でも戦国末期の当地における激戦の1つである「明禅寺崩れ」といわれる合戦がおこなわれた。これは備前国を掌握しつつあつ

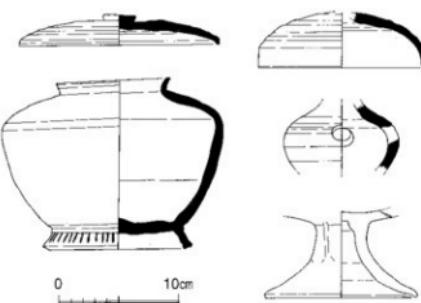


図5 赤田東遺跡調査区南側畠中出土土器

た宇喜多直家と、備中国と美作国の西部を掌握し、備前国の児島までを勢力下に治めた三村氏との直接対決で、永禄十年(1567)におこなわれた。この戦いの後、宇喜多直家は備前国の大名として確立していくのである。ところで旭東平野北半では「明禪寺崩れ」の戦死者を弔った首塚がかつては数十ヶ所も存在していたといわれているが(水藤1937)、現在はほとんどが開墾により削平されてしまっている。また、付近にある中心的城郭は、龍ノ口山塊西端にある龍ノ口山城で、城主は権所元常で、永禄四(1561)年に宇喜多直家の謀略によって落城した。出丸を伴う連郭式山城で土塁や堀切が残っており、備前焼瓦の破片も(図4-2)採集されている。これは、口縁端部に凹線文をめぐらせておらず、15世紀代の年代と考えられるが、備前焼は伝世する場合も多々あり、中世の城跡から貯水のための備前焼甕が出土することは一般的であることから、城に伴う遺物である可能性も高いといえる。

近世は旭川西岸に岡山城を中心とした城下町が形成され、岡山城及び岡山城下に関する発掘調査もおこなわれており、多くの成果が上がっている(出宮・乗岡1997、乗岡1998・2002)。

註

- (1) 高島公民館建設に伴って岡山市教育委員会による発掘調査がおこなわれた。

引用文献

- 伊藤 晃「富原北魔寺・富原遺跡」『岡山県史』考古資料 1986年
 伊藤 晃_{et al.}「田益田中(笠ヶ瀬川調節池)遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』140 1999年
 宇垣匡雅「吉備の前期古墳 - II 宮田山王山古墳の測量調査 -」『古代吉備』第10集 1988年
 宇垣匡雅_{et al.}「原尾島遺跡(藤原光町3丁目地区)」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』139 1999年
 江見正己_{et al.}「足守郡矢南向遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』94 1995年
 扇崎 由「両山平野発見の火山灰」『古代吉備』第11集 1989年
 扇崎 由_{et al.}「上伊福・南方(漁生会)遺跡 南方蓮田調査区 I」『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1994(平成6)年度 1996年
 扇崎 由_{et al.}「上伊福・南方(漁生会)遺跡 南方蓮田調査区 II」『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1995(平成7)年度 1997年
 扇崎 由_{et al.}「上伊福・南方(漁生会)遺跡 上伊福立花丘調査区」『岡山市埋蔵文化財調査の概要』1996(平成8)年度 1998年
 太田好治「宮竹野跡遺跡」2 浜松市文化協会 1994年
 岡田 博「宮衙」『吉備の考古学的研究』(下)山陽新聞社 1992年
 岡山理科大学友会考古学部「沢田大塚古墳」「サスカイト」第2号 1970年
 小野山節「古墳と王朝の歩み」「古代史発掘⑥古墳と国家の成り立ち」講談社 1975年
 鎌木義昌_{et al.}「金蔵山古墳」「倉敷市考古館研究報告」第一冊 1959年
 鎌木義昌「第1編 原始時代」「岡山市史」古代編 岡山市役所 1962年
 鎌木義昌「神宮寺山古墳」「岡山市史」古代編 岡山市役所 1962年
 鎌木義昌「旗振台古墳」「岡山市史」古代編 岡山市役所 1962年
 神谷正義「津島江道遺跡」「日本における稻作農耕の起源と展開」日本考古学協会 1988年
 河田健司「備前国府推定地(南国長)遺跡」「岡山市埋蔵文化財発掘調査の概要」1996(平成8)年度 1998年
 川西安幸「円筒埴輪総論」「考古学雑誌」第64卷第2号 1978年
 草原孝典「津島江道遺跡」「岡山市埋蔵文化財調査の概要」1996(平成8)年度 1998年
 草原孝典「唐人塚古墳石室の測量調査」「岡山市埋蔵文化財調査の概要」1999(平成11)年度 2001年
 草原孝典「新道遺跡」岡山市教育委員会 2002年
 草原孝典「ハガ遺跡」岡山市教育委員会 2004年
 桑田俊明「中井・三反田遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」92 1994年
 河本 清_{et al.}「岡山城二の丸跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」78 1991年

- 近藤義郎「都月坂二号弥生墳丘墓」「岡山県史」考古資料 1986年
- 近藤義郎「都月坂一号墳」「岡山県史」考古資料 1986年
- 近藤義郎「備前車塚古墳」「岡山県史」考古資料 1986年
- 近藤義郎「淡茶臼山古墳」「岡山県史」考古資料 1986年
- 近藤義郎「一本松古墳」「岡山県史」考古資料 1986年
- 近藤義郎¹²⁶「岡山市七つ塚古墳群」岡山市七つ塚古墳群調査団 1987年
- 近藤義郎「岡山市津島の俗称『おつか』と称する前方後円墳についての調査の概略報告」「古代吉備」第10集 1988年
- 下澤公明「弥生時代後期末の吉備南部の社会について」「古文化談叢」第45集 2000年
- 高橋謙¹²⁷「雄町遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」 1969年
- 都出比呂志「日本古代の国家形成論序説－前方後円墳体制の提唱」「日本史研究」343 1991年
- 富岡直人¹²⁸「岡山市津島東3丁目朝寝鼻貝塚発掘調査概報」「加計学園埋蔵文化財発掘調査報告書」2 1998年
- 高畑知功¹²⁹「百間川兼基遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」56 1982年
- 出宮徳尚¹³⁰「貴田廃寺発掘調査報告」「貴田廃寺発掘調査団」 1971年
- 出宮徳尚¹³¹「南方遺跡発掘調査概報」岡山市教育委員会 1971年
- 出宮徳尚¹³²「岡山市四御神上の山・一号墳発掘調査報告」「岡山市教育委員会」 1974年
- 出宮徳尚¹³³「幡多廃寺発掘調査報告」「岡山市遺跡発掘調査団」 1975年
- 出宮徳尚・乗岡 実「史跡岡山城跡本丸中の段発掘調査報告」「岡山市教育委員会」 1997年
- 出宮徳尚¹³⁴「南方(国立病院)遺跡発掘調査報告」「岡山市教育委員会」 1981年
- 内藤善史「絵図・南方遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」110 1996年
- 乗岡 実「岡山市域における最近の発掘調査成果」「古代吉備」第12集 1990年
- 乗岡 実「岡山市域における最近の発掘調査」「古代吉備」第13集 1991年
- 乗岡 実「岡山城内堀」「岡山市教育委員会」 1998年
- 乗岡 実「岡山城三之曲輪跡－表町1丁目地区内車開発ビル建設に伴う発掘調査」「岡山市教育委員会」 2002年
- 平井 勝¹³⁵「百間川沢田遺跡」3「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」84 1993年
- 藤江 望¹³⁶「清水谷遺跡(一本木地区)」「矢掛町埋蔵文化財発掘調査報告」1 2001年
- 正岡睦大「岡山市乙多見における改修工事に伴う発掘調査」「岡山県埋蔵文化財報告」3 1989年
- 正岡睦夫¹³⁷「津島遺跡」2「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」151 2000年
- 松本和男¹³⁸「岡山城二の丸跡」中国電力内山変電所建設事業委員会 1998年
- 水野千代造「高島村史」吉備高島聖蹟顕彰會 1937年
- 物部茂樹¹³⁹「百間川米田遺跡」4「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」164 2002年
- 柳瀬昭彦¹⁴⁰「南方遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」40 1981年
- 柳瀬昭彦¹⁴¹「田益田中(国立岡山病院)遺跡」「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告」141 1999年
- 家根祥多「弥生時代のはじまり」「季刊考古学」第19号 1987年
- 山本悦世¹⁴²「鹿田遺跡」「岡山大学構内遺跡発掘調査報告」第3冊 1988年
- 山本悦世¹⁴³「津島廻大遺跡」3「岡山大学構内遺跡発掘調査報告」第5冊 1992年
- 吉田 晶「吉備と律令体制の確立」「岡山県史」 古代II 1990年

第Ⅱ章 調査の経過

赤田東遺跡は、旭川東岸平野の中央に位置し、北には備前国府推定地、西隣には白鳳期創建の幡多庵寺などがあり、周囲の山塊には大小の古墳が無数にある。まさに吉備中枢地にある遺跡といえる。吉備は地方にしては特殊な存在で、畿内中央に対して三度もの反乱伝承をもち、大王墓に匹敵する古墳も築いている。赤田東遺跡の発掘調査では、それに比例するような集落遺跡の存在が予想された。

岡山市立竜操中学校の新たに取得する予定の敷地に、同中学校のプール及び格技場の建築工事事業が岡山市教育委員会当局によって設定された。敷地は赤田東遺跡に含まれており、隣接する位置にある体育館の建設工事の際におこなわれた発掘調査の成果と照合しても、現水田直下から包含層が存在するものであり、設計変更等により遺跡の保存を図るのは不可能であった。そのため、文化財課と事業の直接担当課である施設課と協議を重ねた結果、記録保存を平成13年度中からおこなうことで合意に達した。発掘調査は平成13年6月18日に着手し、平成14年5月31日に終了した。着手後、岡山市教育委員会教育長から、岡山県教育委員会教育長宛に文化財保護法第58条2第1項に基づく「埋蔵文化財調査の報告」が提出された。発掘調査面積は1520.25m²である。

平成14年4月27日(土)には、発掘調査現地説明会をおこない、初夏特有の強い日差しの照りつけるなかにもかかわらず、400名を越える参加があった。

発掘調査組織

発掘調査主体者 岡山市教育委員会委員長 玉光源爾

発掘調査対策委員
稻田孝司(岡山大学教授)
狩野 久(京都橘女子大学教授)
西川 宏(山陽学園講師)
間瀬忠彦(倉敷考古館館長)
水内昌康(日本考古学协会会员・前岡山市文化財保護委員会議長)

発掘調査担当者 出宮徳尚(岡山市教育委員会文化財課長)

三宅一正(岡山市教育委員会文化財課調整主幹)

根木 修(岡山市教育委員会文化財センター所長)

神谷正義(岡山市教育委員会文化財課主査)

扇崎 由(岡山市教育委員会文化財課主任)

柴田英樹(岡山市教育委員会文化財課主任)

(調査員) 草原孝典(岡山市教育委員会文化財保護主事)

西田和浩(岡山市教育委員会文化財保護主事)(平成14年4月より)

(経理員) 福永みどり (岡山市教育委員会文化財課主任)

発掘調査現場作業員 小林純一郎 佐々木龍彦 中川美知雄 中村初子 那須鉄雄 雜波茂夫
西崎洋子 藤田光夫 藤田光子 水内汲子 山本好子 吉村順次

発掘調査現場事務員 野村香里

出土物整理事務員 坪井聰子 都井京子 矢部桃子 山元尚子 和田かほり

調査にあたり、対策委員会の先生方には多人なるご指導・ご助言を頂いた。また、白石純、鈴木景二、高橋照彦、武田恭彰、富岡直人、中野雅美、弘田和司、山本悦世の諸氏には諸々のご教示・ご助言を頂いた。諸々にご助勢くださった方々に深謝する次第である。

経過と概要

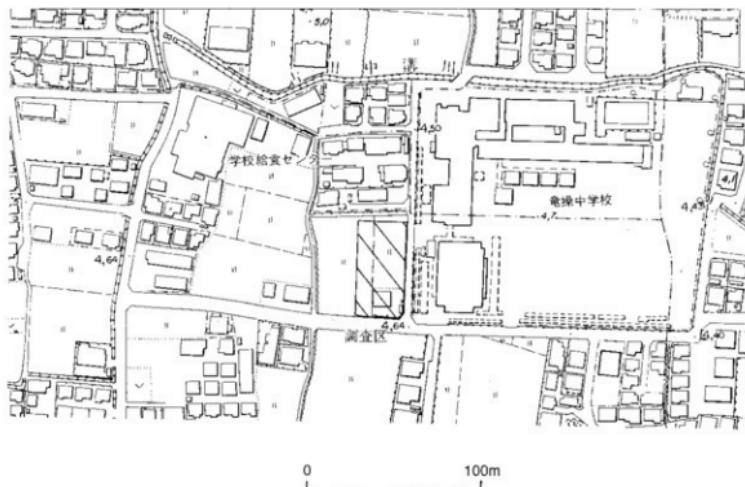
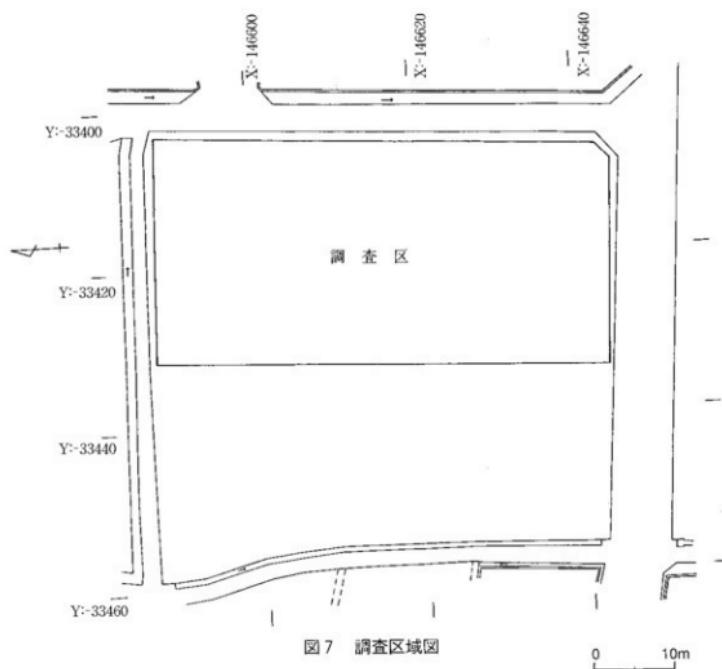


図6 調査区位置図



調査は現水田の耕土を重機によって除去しておこなった。発掘区の層序は西側の壁面(図8)から得た。

近世の水田層は、調査区の北端と南端で認められ、西側にも調査区に沿うようにして認められた。つまり、調査区の大半は現水田直下に包含層が広がっていたのである。しかしながら、近世に属する遺物は極めて稀で、集落に直接関係するような遺構も認められなかつた。したがつて、耕土は残存していないが、近世段階では、畠などの耕作地として利用されていたと考えられる。

包含層を精査中は中世に属する遺物はほとんど認められなかつたため、当初は中世の遺構はないのではないかと思われた。しかしながら、中世以降の包含層は、後の削平を受けてほとんど残存していないだけで、調査区の中央付近にまとまる傾向はあったが、柱穴・井戸・墓などの遺構が一定量検出された。ただし、遺構や遺物の構成から、一般的な集落と考えられた。

古代の遺構面からは正方位の方向にあわせた掘立柱建物が3小期重なつて検出された。銅製帶金具や畿内から撒入された土師器も出土していることから、官衙に関連されるとも考えられた。しかし、遺構の構成から、官人などの居住は想定されるが、遺構自体は集落の範疇にはいると考えられた。

古墳時代後期の遺構面からは竪穴住居と掘立柱建物が多数検出された。鉄生産に関連する遺物や、製塩土器、馬の骨なども出土しており、古代に吉備といわれた地域の有力な集落の1つであったことがうかがわれる。さらに、竪穴住居と掘立柱建物は、明らかに異なる性格であったことをうか

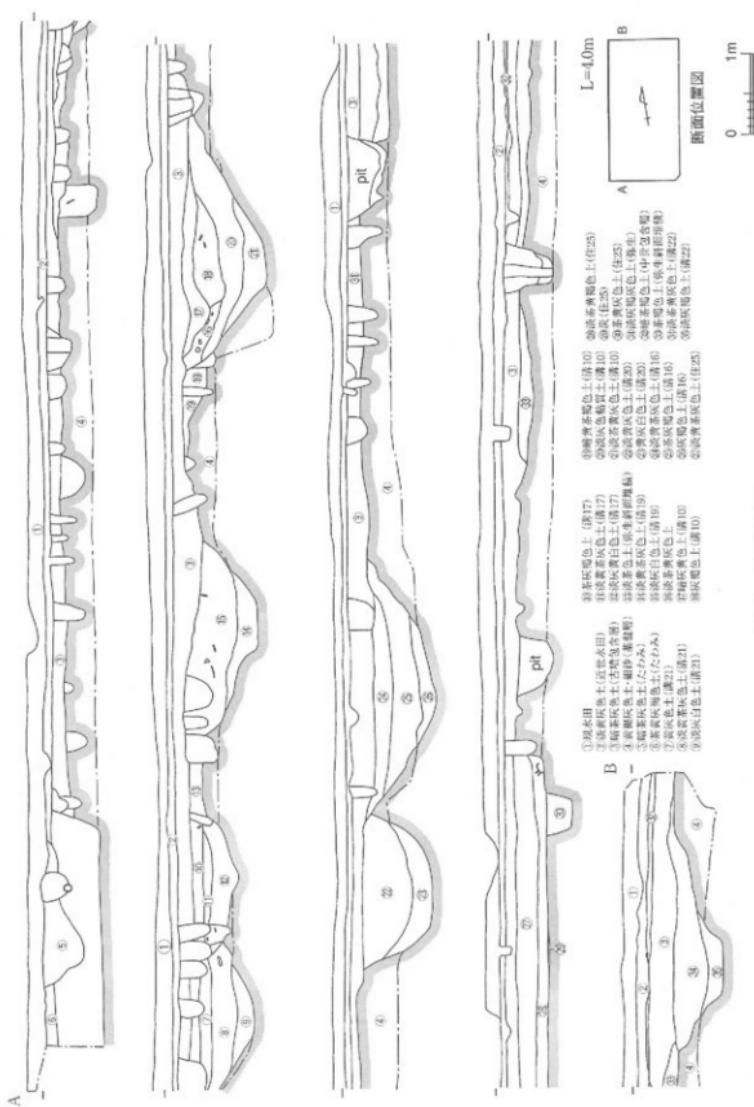


図 8 土層断面図

がわせる配置をとっている。堅穴住居は数軒がまとまって1つの単位を構成し、それがいくつか集まって集落を形成している。しかし、それらの単位には共通の方向性が単位の範囲を示す区画などはない。掘立柱建物については、棟方向を合わせた建物群が1つの単位を構成し、それらを区画する溝が規則的にめぐらされている。堅穴住居から掘立柱建物への変化は、連続的な時間軸のなかでおこなわれているが、両者の性格にはかなり際立った相違が存在するといえる。

弥生時代中・後期の遺構面からは、堅穴住居、土塁、溝が検出された。とくに溝は微高地中央を何度も掘り直して掘削しており、積極的な水田開発がおこなわれたことを示唆している。しかし、一方では後期中葉以降の遺構や遺物が途切れることは、給水源となる流路の方向が変わったためと考えられ、この期の水田經營の遼さもうかがえる。遺物も多く出土しており、なかでも奈良県二上山産製のサヌカイトでつくられた石劍は注目される。

弥生時代の遺構から、縄紋時代晩期の土器が出土しており、それらは器表面の摩滅もほとんど認められないことから、遠くから運ばれてきたとは思われない。中世の井戸の壁面を観察する限り、かなり強固な微高地であることから、付近に縄紋時代の集落が存在している可能性はかなり高いといえる。

発掘日誌（抄）

平成13年 6月18日	発掘調査開始
8月27日	遺跡保護少年団の会議を開催
9月13日	立命館大学本郷ゼミ現地を見学
9月14日	中世遺構面終了、古代遺構面精査開始
11月1日	古代遺構面終了、古墳時代後期遺構面精査開始
11月2日	発掘調査対策委員会開催
12月25日	多くの動物骨が出土したため、岡山理科大学宮岡直人氏より現地で多くの指導と助力を頂いた
平成14年 2月19日	京都大学の藤井裕之氏が現地で、残存している柱材のサンプリングをおこなう
3月19日	発掘調査対策委員会開催
3月20日	古墳時代後期遺構面終了、弥生時代遺構面精査開始
4月27日	現地説明会開催、初夏の強い日差しの中、400名を越える見学者がある
5月14日	弥生時代遺構面終了
5月31日	発掘調査対策委員会開催・調査終了・発掘機材撤収

第Ⅲ章 遺構と遺物

中世から弥生時代にかけての遺構が検出された。それぞれの層序関係については前章を参照されたいが、ここでは各遺構と、そこから出土した遺物の概要を大まかな時期ごとに分けて説明する。

1 近世（図9～11）

近世の遺構は、水田耕作に伴うと考えられる素堀り溝と若干の凹凸である。出土した遺物は極めて少なく、該期の集落域は当調査区からやや距離があったものと推測される。また、調査区中央が南北幅で48m、東西幅で25mほどの隅丸方形状に高くなっている。この部分は現水田耕土直下が包含層で、近世の水田層は認められなかった。これは中世の柱穴が分布する範囲とも重なっており、当地の集落で最も高い地点の一つであったことを示している。

遺物は近世陶磁器の小片が若干と、包含層上面を耕作した際に掻き上げられて微細な小片となった土器片が出土したのみである。図化できたのは内面に車輪文叩きの認められる須恵器の壺の胸部片(1)と、弥生時代後期の器台片(2)、弥生時代中期の壺の胸部片を加工したと推測される有孔円盤(D1)のみである。

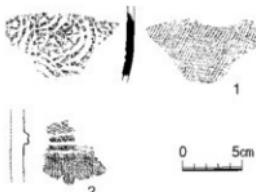


図9 近世水田層出土遺物(1)

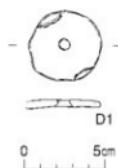


図10 近世水田層出土遺物(2)

2 中世（図12）

中世の遺物は、包含層掘削時や上面の近世水田層中からも全く出土しなかった。そのため当調査区付近には中世の集落は存在しないという予想もしていた。しかし、遺構の精査をおこなったところ、中世の柱穴や井戸などの遺構が検出された。ただし、その範囲は調査区中央のみである。その部分は近世遺構面で最も高かった地点である。中世の水田層や畠の耕作土層などは認められなかったが、調査区の北端と南端のやや微高地部でも低い部分は開発され、最も高い部分のみが集落地として利用されていたからであろう。時期幅は12世紀後半～15世紀の間であるが、その間に集落の断絶や移動の有無が存在していたかどうかなどは、出土した遺物が少ないため明確ではない。しかしながら、15世紀以降の遺構や遺物は認められず、16世紀ぐらいから全面的に水田化されていった可能性が高い。

建物1（図13）

調査区中央北端で検出された掘立柱建物で、調査区外へ延びることから、建物全体の柱構成等は不明である。現況では桁行3間、梁間2間以上である。棟方向はほぼ南北で、この方向は建物1の

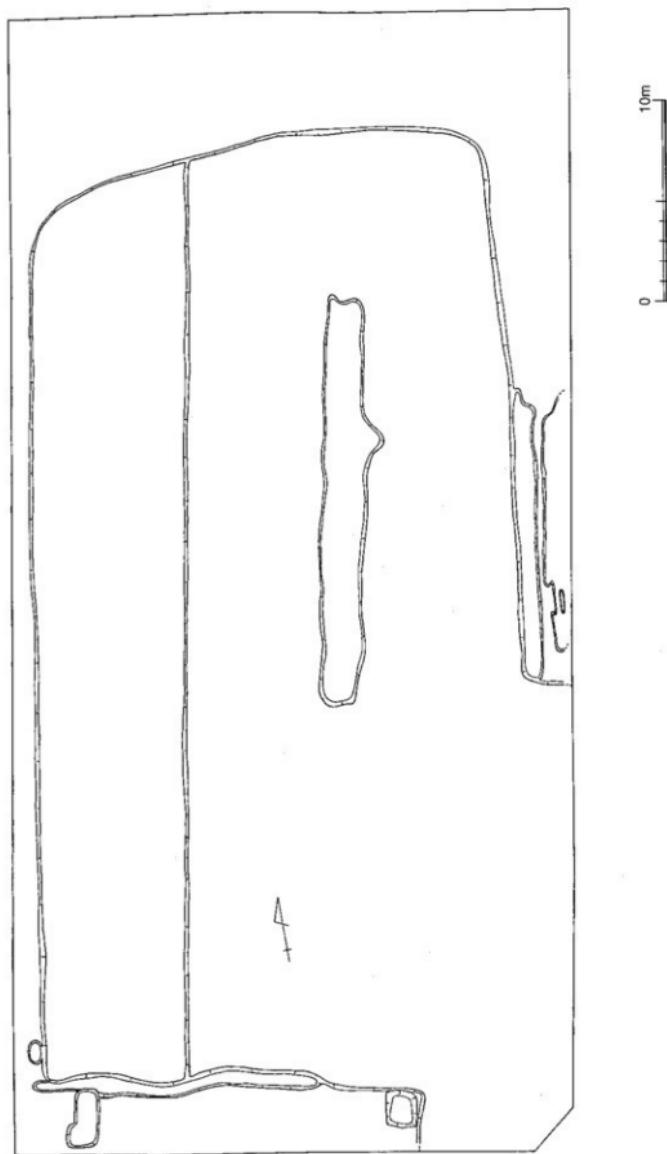


図11 近世遺構配図

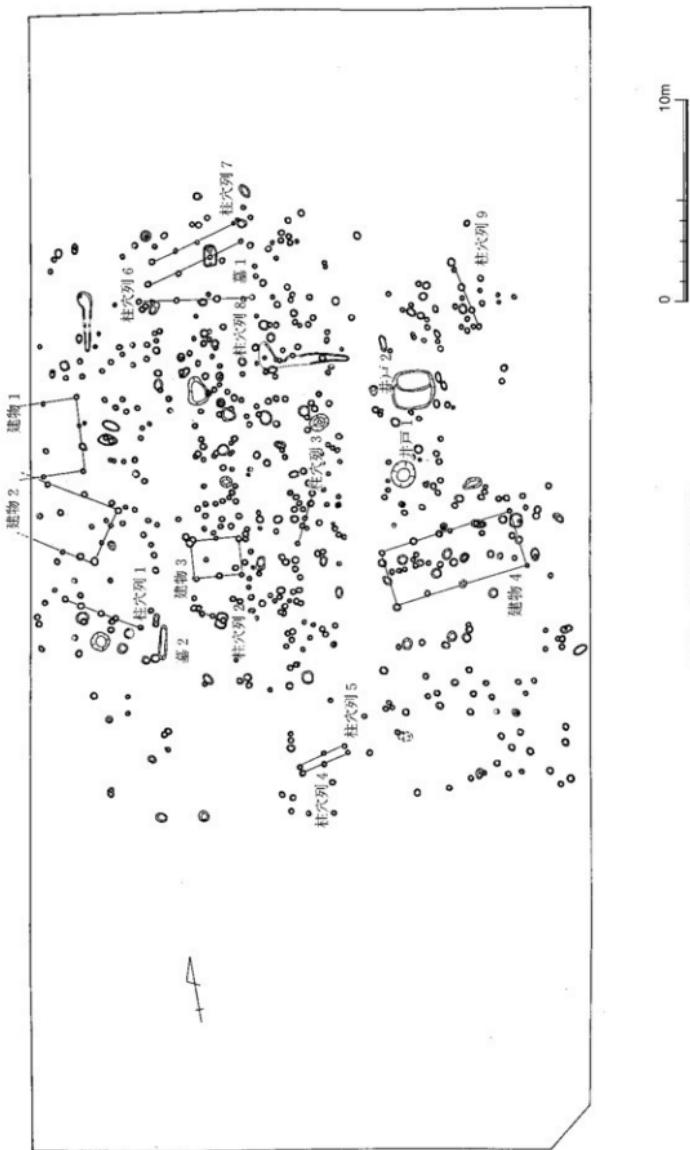


図12 中世遺構配置図

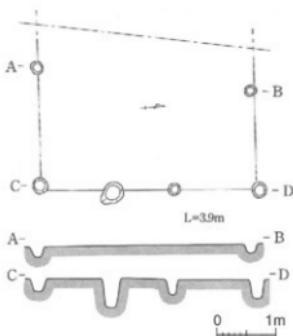


図13 建物1 実測図

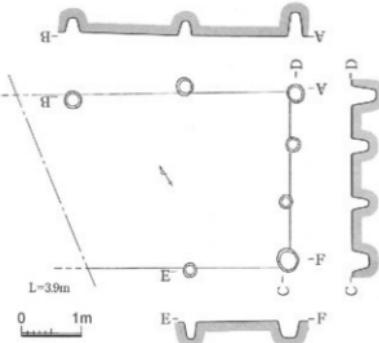


図14 建物2 実測図

東側にある建物3や柱穴列8と共に通する。遺構検出面は3.8m付近である。柱穴の平面形は径0.3~0.4mの円形で、深さは検出面から0.3~0.5mである。

遺物は土師質土器の小片が若干出土した。

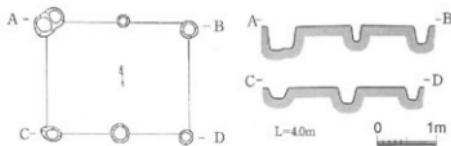


図15 建物3 実測図

建物2 (図14)

調査区中央北端で検出された掘立柱建物で、西端は調査区外へ延びることから、建物全体の柱構成等は不明である。現況では桁行3間以上、梁間3間である。棟方向はN-57°Wで、建物2の南側にある柱穴列1と共に通する。遺構検出面は3.8m前後、柱穴の平面形は径0.2~0.4mの円形で、深さは検出面から0.2~0.3mである。

遺物は土師質土器の小片が若干出土した。

建物3 (図15)

調査区中央のやや北寄りで検出された掘立柱建物である。桁行2間、梁間1間の柱構成で、棟方向はほぼ南北方向である。建物1や柱穴列8と方向性が共通しており、一連の建物群になることが予想される。遺構検出面は3.9m付近で、柱穴の平面形は径0.2~0.3mの円形である。深さは検出面から0.3~0.5mである。床面積は4.2m²である。

遺物は土師質土器の小片が若干出土した。

建物4 (図16)

調査区中央南半で検出された掘立柱建物である。桁行4間、梁間2間の柱構成で、棟方向はE-5°-

Nである。柱穴列9が建物4の棟方向と直交の関係にあり、その間に井戸1と井戸2が位置する。遺構検出面は3.8m付近で、柱穴の平面形は径0.2~0.4mである。北東隅の柱穴から西へ二本目の柱穴は柱痕跡が2つあり、掘り下げ時に平面的・断面的な検討を試みたが、相互に切り合い関係を認めることができなかったことから、どちらかが添柱であった可能性が高いといえる。遺構検出面は3.8m付近で、柱穴

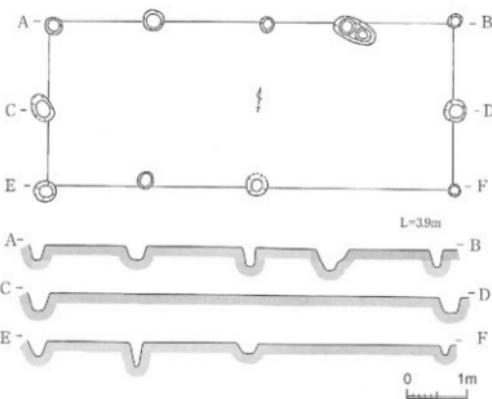


図16 建物4 実測図

の平面形は径0.3~0.4mの円形である。深さは検出面から0.2~0.5mである。床面積は17.9m²である。遺物は土師質土器の小片が若干出土した。

柱穴列1 (図17)

調査区中央北半で検出された柱穴列である。柱の方向はN-55°-Wで、ほぼ建物2の棟方向と共に通する。柱穴が5個で西側へ繋がないことから、建物2の南東コーナー付近を意識した目隠し塀の可能性が高い。遺構検出面は3.8~3.9mで、柱穴の平面形は径0.4m前後の円形である。深さは検出面から0.3m前後である。

遺物は土師質土器の小片が若干出土した。



図17 柱穴列1 実測図



図18 柱穴列2 実測図



図19 柱穴列3 実測図



図20 柱穴列4 実測図

柱穴列 2 (図18)

調査区中央北半で検出された柱穴列である。柱の方向はN-53°-Wで、柱穴列1と共に通する。ただし、柱の間隔は0.2~0.3mで、柱穴列1と比べるとかなり狭い。遺構検出面は3.9m付近で、柱穴の平面形は径0.3m前後の円形である。深さは検出面から0.1~0.5mである。

遺物は土師質土器の小片が若干出土した。

柱穴列 3 (図19)

調査区中央付近で検出された柱穴列である。柱の方向はN-20°-Eで柱穴列1と直交する。建物2を中心とした屋敷地の南限を示す目隠し塀の可能性を想定させる。遺構検出面は3.9m付近で、柱穴の平面形は径0.3m前後の円形である。深さは検出面から0.2~0.4mである。

遺物は土師質土器の小片が若干出土した。

柱穴列 4 (図20)

調査区中央南半で検出された柱穴列である。柱の方向はE-9°-Nで、柱穴列5とほとんど同じ位置で平行する。遺構検出面は3.8m付近で、柱穴の平面形は径0.3m前後の円形である。深さは検出面から0.3~0.4mである。

遺物は土師質土器の小片が出土した。

柱穴列 5 (図21)

調査区中央南端付近で検出された柱穴列である。柱の方向はE-9°-Nで、柱穴列4とほとんど同じ位置で平行する。遺構検出面は3.8m付近で、柱穴の平面形は径0.2m前後の円形である。深さは検出面から0.2~0.3mである。

遺物は土師質土器の小片が若干出土した。



図21 柱穴列5 実測図

柱穴列 6 (図22)

調査区中央北端で検出された柱穴列である。柱の方向はE-10°-Sで、柱穴列7とほとんど同じ位置で平行する。この方向は柱穴列4・5ともほぼ同じであり、建物4の棟方向とも近い。それぞれが組み合って1つの屋敷地を形成している可能性が高い。遺構検出面は3.8m付近で、柱穴の平面形は径0.3~0.4mの円形である。深さは検出面から0.2~0.5mである。

遺物は土師質土器の小片が若干出土した。



図22 柱穴列6 実測図



図23 柱穴列7 実測図

柱穴列7（図23）

調査区中央北端で検出された柱穴列である。柱の方向はE-10°-Sで、柱穴列6とはほぼ同じ位置で平行する。柱穴列6と同様に、建物4を中心とした屋敷地の北西隅部の日隠し塀の可能性が推測される。遺構検出面は3.8m付近で、柱穴の平面形は0.3m前後の円形である。深さは検出面から0.4m前後である。

遺物は土師質土器の小片が若干出土した。



図24 柱穴列8 実測図

柱穴列8（図24）

調査区北西部で検出された柱穴列である。柱の方向はE-10°-Nで、建物1・3と方向性が似ており、それら2つの建物で構成される屋敷地の北東隅部の日隠し塀の可能性が推測される。遺構検出面は3.8m付近で、柱穴の平面形は径0.2~0.3mの円形である。深さは検出面から0.3~0.5mである。

遺物は土師質土器の小片が若干出土した。

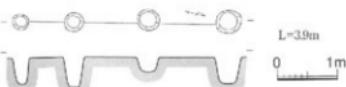
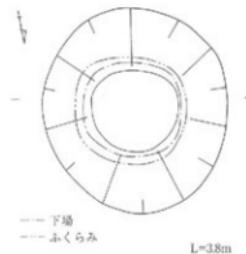


図25 柱穴列9 実測図

柱穴列9（図25）

調査区中央東端付近で検出された柱穴列である。柱の方向はN-10°-Wで、建物4の棟方向や柱穴列4・5・6・7と直交することから、それらと組み合って1つの屋敷地を構成する可能性が推測される。遺構検出面は3.8m付近で、柱穴の平面形は径0.3~0.5mの円形である。深さは検出面から0.2~0.4mである。

遺物は土師質土器の小片が若干出土した。



井戸1（図26・27）

調査区中央やや東寄りで検出された井戸である。長径2.5m、短径2.25mの長楕円形の平面形を呈する。建物4に付属する位置関係にあり、両者の有機的な関係が推測される。遺構検出面は3.8m前後で、深さは検出面から3.1mである。断面形は検出面から底に向かってロート状にすぼまり、深さ1.0mの位置で径1.1mの円柱状となるが、深さ1.9mの位置から底までは逆に、径1.4mほどに広がる。埋土は3層で、①層は井戸廃絶後のくぼみに堆積したものである。②層は上器や角礫がかなり含まれていることから、人為的に埋められたものと考えられる。③層からは遺物はほとんど含まれてお

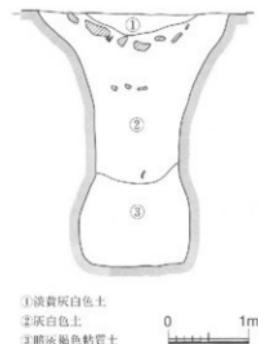


図26 井戸1 実測図

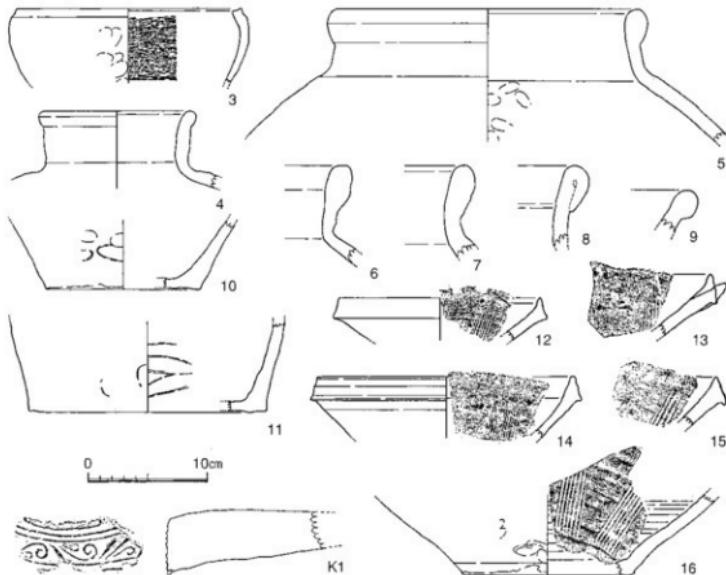


図27 井戸1 出土遺物

らす、微細な土師質土器の小片が若干出土したのみであった。

遺物の大半は備前焼で、間壁編年IV期(間壁1966)、桑岡編年中世4~5期(桑岡2000)、重根編年IVB-1~IVB-2(重根2002)に対応し、実年代としては15世紀である。瓦質も鉢(3)が一点出土したが、ほかの器種は認められなかった。備多磨寺所用の軒平瓦(K1)も出土しているが、これについては全体にススが付着していることや、平瓦などの瓦類が全く出土していないことから、炉の台などに2次転用するため、あるいはしたために、当遺跡へ持ち込まれたものと考えられる。

井戸2 (図28~30)

調査区中央東より検出された井戸である。全体の形が一辺4mほどの隅丸方形であるが、土層断面の観察からは2つの遺構が切り合っているようにも見える。すなわち一辺4m程の井戸の北半に長さ3.5m、幅2.2mの井戸を新たに掘りなおしたという見方である。しかし、両者は北側から南側にかけての壁部分を共有するなどプラン的にはかなり親縁性が認められる。当初の井戸とされる

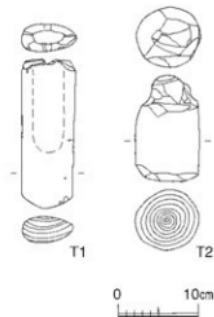


図28 井戸2 出土遺物(1)

部分の埋土は、基本的にはベースの土層がかなり混入して井戸埋土に特徴的な粘質土が認められないことから、井戸の掘り方の埋土と考えることが妥当であろう。木片が井戸底部から出土したことから、井戸枠が抜き取られたと考えられ、そのため2つの井戸が重なっているようにみえたのである。

遺構検出面は3.8m付近で、最深部の深さは検出面から3.25mである。遺物は⑤層から若干土師質土器の小片が出土したものとの、基本的には⑬層から出土したものばかりである。なかでも径65cm、深さ45cmの曲物が横倒しの状態で出土し、内部に遺物は認められなかったが、あたかも土師質土器椀が曲物から溢れ落ちた状態で重なって出土した。湧水が激しいため、詳細な出土位置までは把握できなかったが、周辺からは土師質土器皿もまとまって出土しており、椀と皿が曲物に入れられていた可能性が高い。

遺物は、曲物の周辺から出土した土師質土器椀(17~28)、同杯(29)、同皿(30~39)で、いずれも完形か、もしくは完形に近いものばかりで一括性の高いものといえる。椀の中には底部外面に墨書が認められるものが3点あり、(18)などは平仮名の「よし」を上下から書き入れているようにもみえる。土器のはかに木製品も2点出土している。(T 1)は刀の柄で、柄頭から8.9cmの位置に径4mmの目貫穴が認められる。表面は平滑で丁寧に仕上げられているが、装飾等は認められない。(T 2)は先端を独楽状に尖らせているが、かなり荒い加工であり製品でない可能性が高い。当遺構の時期は椀の特徴から12世紀末といえる。

墓1 (図31)

調査区北半中央付近で検出された遺構である。遺構検出面は3.8m付近で、深さは検出面から0.2mである。箱形の平面形や断面形を呈することや、角礫を意識的に配置していることから骨は出土しなかったが、墓の可能性が高いといえる。長さ1.1m、幅0.6mの規模で、北端には底部から角礫を5つ積んで上面をテーブル状にし、その中央には土師質土器皿を一枚おいていた。ただし、皿は焼成

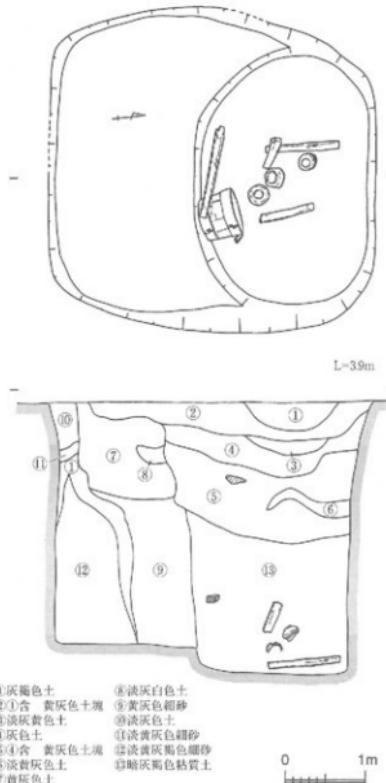


図29 井戸2 実測図

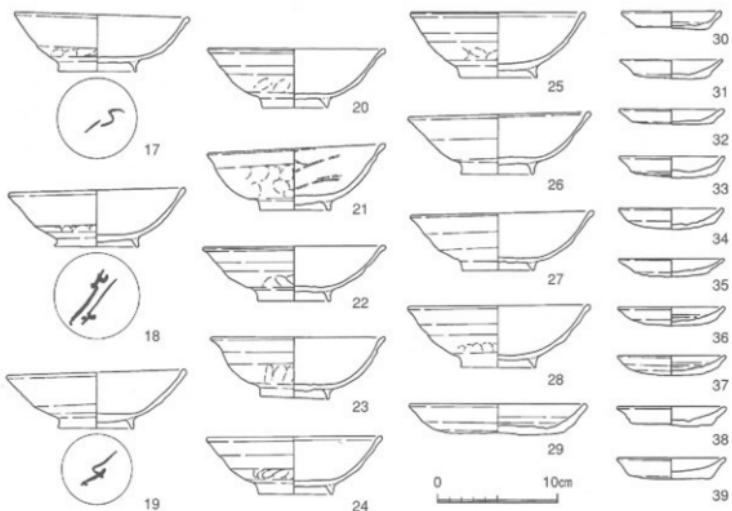


図30 井戸2 出土遺物(2)

がかなり甘かったことに起因してか、検出時点でもかなり脆くなってしまっており、取り上げることはできなかった。ただし、検出時の観察から井戸2とはほぼ同じ時期といえる。また、この墓1は柱穴列6によって切られており、中世における遺構の重複関係を整理する手掛かりにもなる。

墓2（図32）

調査区中央南側で検出された墓である。長軸方向は墓1とはほぼ同じである。両墓とも居住域と考えられる柱穴の集中する調査区中央の両端に位置することから、それぞれの位置関係を意識している可能性が高い。遺構検出面は3.8m付近で、深さは検出面から0.1mである。断面形は台形であることや、土層観察からも木棺痕跡などは認められることから、土壙の中に直接埋葬したものといえる。人骨の遺存状況は良好とはいえないが、両足を交差させ、右手を若干左手側にずらして埋葬していた。

副葬品ではなく、出土遺物も土師質土器の小片が若干出土しただけであった。しかしながら、遺構の配置から墓1と同時期の可能性が高いと考えられる。

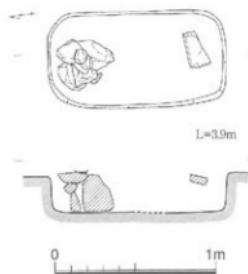


図31 墓1 実測図

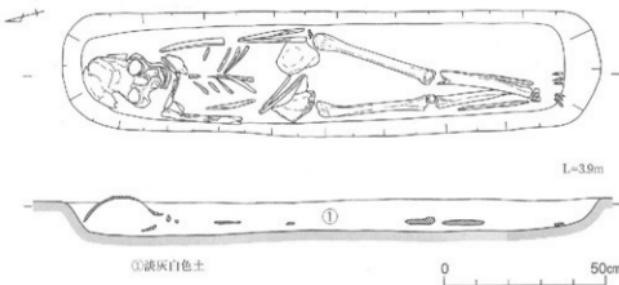


図32 墓2 実測図

3 古代（8・9世紀）（図33）

中世の遺構面のベースとなるのが、古代の遺構面の包含層である。ただし後世の削平の結果、古墳時代の包含層がベースとなっているところがあり、むしろ包含層出土遺物は古代よりも古墳時代後期の遺物の方が多かった。検出された遺構は掘立柱建物、柱穴列、土壙で、建物は真北方向を意識している。

建物1（図34・35）

調査区中央東端で検出された側柱建物である。桁行3間、梁間2間の柱構成で、棟方向はほぼ東西方向である。床面積は 23.2m^2 である。古代の遺構のうち、最も早く検出された遺構であり、かなり上面から柱穴の輪郭がはっきりしていた。遺構の検出面は3.8m付近で、柱穴の掘り方の平面形は基本的に方形であるが、一辺 $0.3\sim0.5\text{m}$ とやや小ぶりである。深さは検出面から $0.2\sim0.3\text{m}$ である。遺物は各柱穴から微細な土器片が出土したが、北東コーナー部の柱穴からはまとまって出土した。柱穴内の遺物を取り上げた後に、柱穴床面で径 0.2m の柱痕跡を検出したことから、平面的な遺構としては明確にできなかったが、柱を抜き取った後に角礫や土器を埋納したと考えられる。

遺物のうち国化できたのは、北東コーナー部の柱穴から出土したもので、完形の上師器杯(40)、底部は完形の土師器杯(41)、土師器鍋の破片(42)である。時期は9世紀後半である。

建物2（図36）

調査区南西コーナー付近で検出された総柱建物である。桁行2間、梁間2間の柱構成で、棟方向はほぼ南北、もしくは東西方向である。床面積は 10.2m^2 である。建物5の中央軸線上に建物2の東側面の柱穴列が重なることから、両建物は同じ計画で建てられたことがうかがわれる。遺構の検出面は3.7m付近である。柱穴掘り方の平面形は基本的に方形で、一辺 $0.6\sim0.8\text{m}$ である。深さは検出面から $0.6\sim0.8\text{m}$ である。ただし、南西コーナー付近の柱穴と東に隣接する柱穴の平面形はかなりいびつで、長梢円形を呈している。それは土層断面を観察すると、他の柱穴と異なり柱痕跡が認められなかつたことから、柱を抜いた抜き取り痕が本来の柱穴の形状を壊したためと考えられる。柱の大きさは柱痕跡から、径 $0.2\sim0.4\text{m}$ である。柱穴埋土には炭や焼土が多く含まれ、柱痕跡が焼土化したも

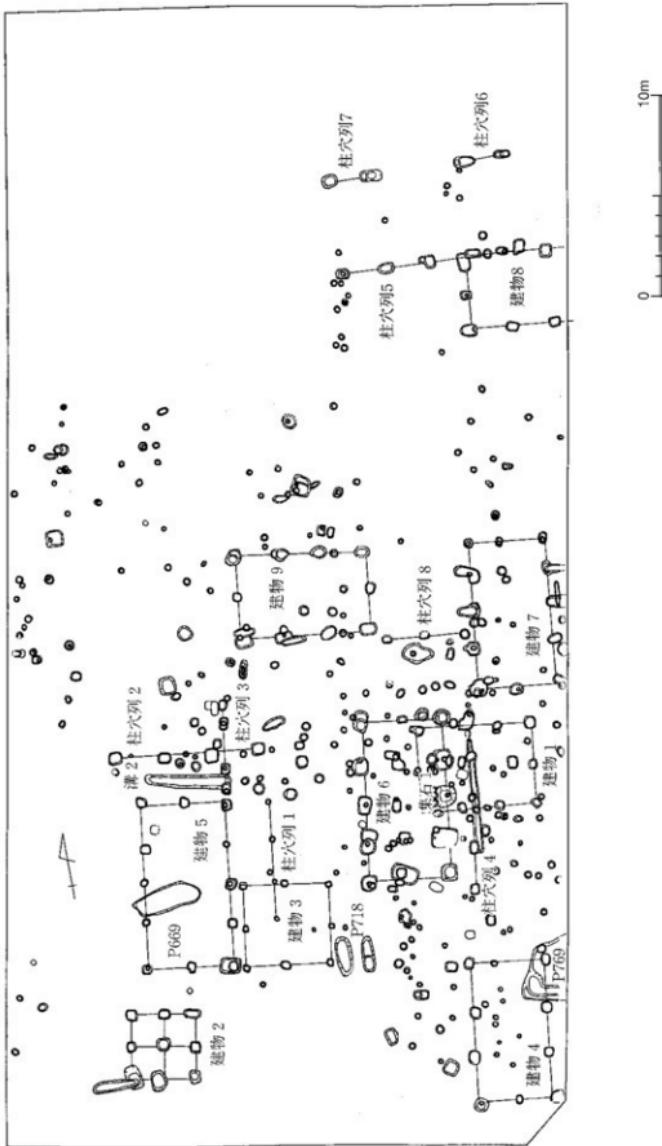


図33 古代(8・9世紀)遺構配置図

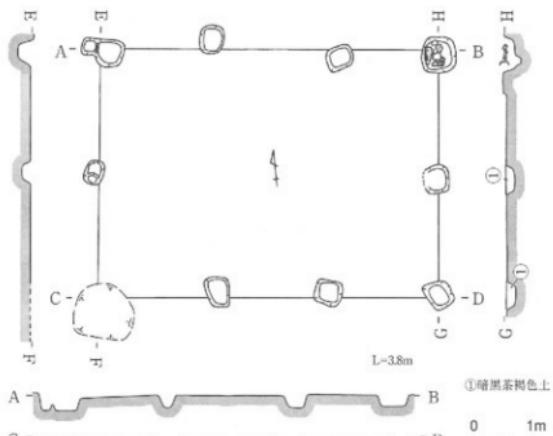


図34 建物1 実測図

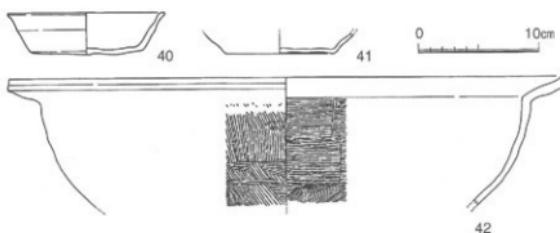


図35 建物1 出土遺物

のもある。このことから建物2は焼失した可能性が高い。

遺物は微細な土器片ばかりであるが、なかに回転台を用いた丹塗りの土師器片が認められることから、9世紀代の時期が推測される。

建物3（図37）

調査区中央南端で検出された側柱建物である。桁行2間、梁間2間の柱構成で、正方形に近い平面形であることから、建物2と同様に倉庫的な用途を持った建物、もしくは本来存在していた東柱が後に削平されてしまった可能性も十分考えられる。北側の柱穴列の軸線上に建物6の南側の柱穴列が重なることから、両建物は同じ計画で建てられたことが推測される。棟方向は南北、もしくは東西方向で、床面積は16.9m²である。遺構検出面は3.7m付近で、柱穴の掘り方の平面形は一辺0.2~0.5mの隅丸方形である。深さは検出面から0.3~0.4mである。

遺物は微細な須恵器が若干出土したのみである。

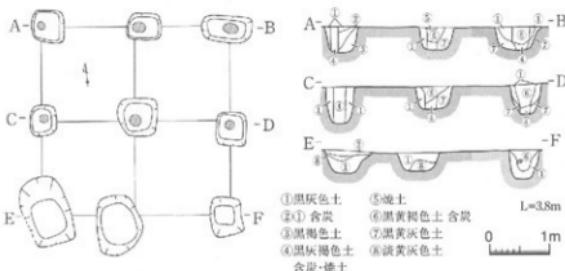


図36 建物2 実測図

建物4（図38）

調査区南東コーナー付近で検出した側柱建物である。桁行3間、梁間2間の柱構成で、棟方向はほぼ南北方向である。床面積は24.6m²である。建物4の西側の柱穴列の軸線と、建物6の東側の柱穴列の軸線とが重なることから、両建物は同じ計画で建てられたことが推測される。遺構検出面は3.7m付近で、柱穴掘り方の平面形は一辺0.6～0.8mの方形である。深さは検出面から0.2～0.4mで、径0.2mの柱痕跡が確認できる。

遺物は微細な土器片が若干出土しただけであるが、8世紀中葉の時期であるP769を北東コーナー部の柱穴が切っていることから、それ以降の時期といえる。

建物5（図39・40）

調査区南西部で検出した側柱建物である。桁行4間、梁間2間の柱構成で、棟方向は、ほぼ南北方向である。建物2の東側の柱穴列と建物5の棟持柱の軸線が重なることから、両建物は同じ計画で建てられたことが推測される。遺構検出面は3.7m付近で、柱穴掘り方の平面形は一辺0.4～1.0mの方形である。なかには掘り方が削平されて柱痕跡だけが残ったものがある。床面積は44.8m²である。柱穴の深さは検出面から0.2～0.4mで、径0.2mほどの柱痕跡が確認できる。また、柱穴埋土には炭や焼土が多く認められ、柱痕跡が焼土化しているものもある。このことから建物5は焼失した可能性が高い。

遺物は各柱穴から微細な土器片が出土したが、図化できたのは須恵器の鉢(43)だけである。

建物6（図41・42）

調査区南東部で検出された側柱建物である。桁行4間、梁間2間の柱構成で、棟方向はほぼ南北である。建物3の北側面の柱の軸線と南側の梁の柱の軸線が重なることと、建物6に付属する目隠

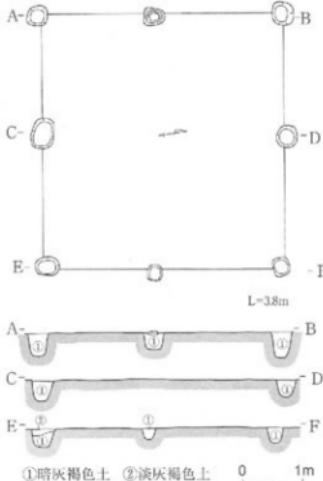


図37 建物3 実測図

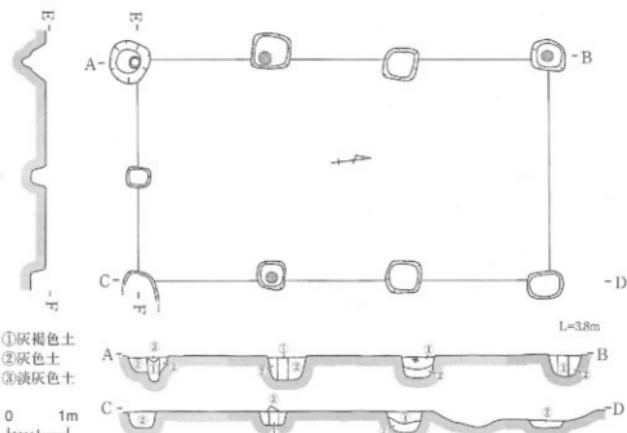


図38 建物4 実測図

し塚と考えられる柱穴列4の軸線と建物4の西側の側柱の軸線が重なることから、建物3、建物4、建物6は同じ計画で建てられたことが推測される。遺構検出面は3.7m付近で、柱穴の掘り方の平面形は基本的に方形で、一辺0.4mほどの小さなものが1つある以外は、概ね1m前後である。深さは検出面から0.2~0.5mで、径0.2mほどの柱痕跡が認められる。床面積は30.8m²である。

遺物は各柱穴から微細な土器片が出土したが、図化することはできなかった。図化できたものは柱穴検出時にまとまつて出土した土器である。厳密にはこの建物に伴う遺物であるとは言い切れないが、いずれも出土地点と柱穴の位置が重なっていたことから、柱穴の最終埋土に伴っていた可能性が高い。土師器の杯身(47)と杯蓋(48)はP1の上面から、須恵器(44~46)はP2の上面から出土した。畿内産の土師器である(49)はP2の上面、丹塗りの土師器で、皿、もしくは杯蓋(52)はP4の上面から出土した。これらの土器から建物6は8世紀後半といえる。

建物7 (図43)

調査区中央の東端で検出された側柱建物である。桁行4間、梁間2間の柱構成で、棟方向はほぼ南北である。建物9の北側の側柱の軸線と建物7の北側梁の軸線が重なることから、両建物は同じ計画で建てられたと推測される。遺構検出面は3.7m付近で、柱穴の掘り方は抜き取り痕との重複のため明瞭でないが、基本的に方形であったといえる。一辺0.4~0.8mほどで、深さは検出面から0.3~0.4mである。柱痕跡が認められるものもあり、そこから径0.2mほどの大きさの柱が用いられていたといえる。床面積は28.1m²である。

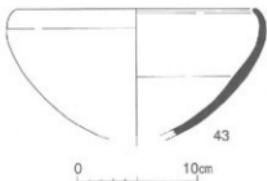


図39 建物5 出土遺物

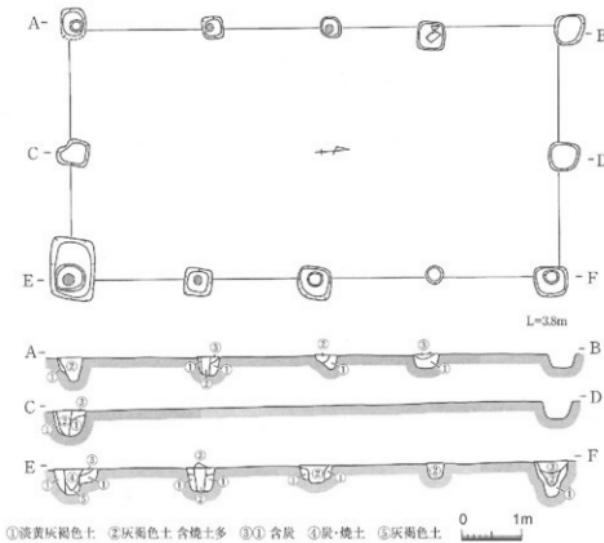


図40 建物5 実測図

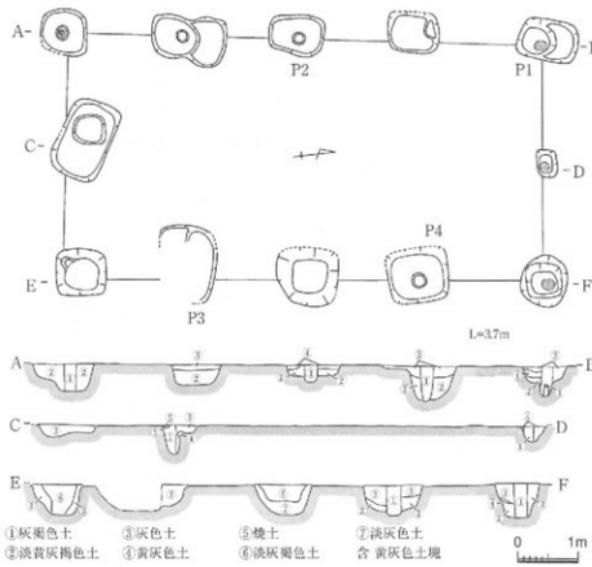


図41 建物6 実測図

遺物は微細な土器片が出土したが、図化できるものはなかった。ただし、回転台を用いた土師器は含まれていないことから、かなり間接的な根拠であるが、8世紀代の年代を考えておきたい。

建物 8 (図44)

調査区北の西端で検出された側柱建物である。桁行2間以上、梁間2間の柱構成

で、棟方向はほぼ東西である。遺構検出面は3.7m付近で、柱穴の掘り方は一辺0.5~0.8m前後である。深さは検出面から0.2~0.3mで、柱痕跡から柱の大きさは径0.15mである。床面積は14.4m²以上である。

遺物は微細な須恵器片や土師器片が出土したが、図化できるものはなかった。ただし、土師器には回転台を用いたものは含まれておらず、かなり間接的な根拠であるが、8世紀の年代を考えておきたい。

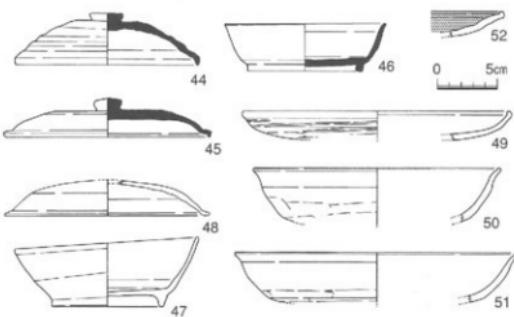


図42 建物 6 出土遺物

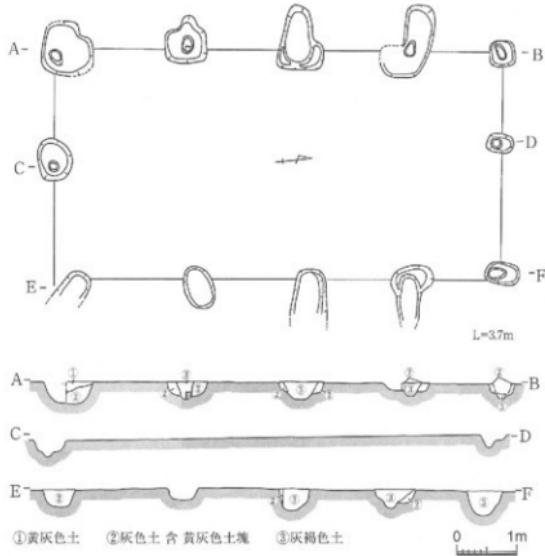


図43 建物 7 実測図

建物 9 (図45)

調査区中央付近で検出された側柱建物である。桁行3間、梁間2間の柱構成で、棟方向はほぼ東西である。遺構検出面は3.7m付近で、柱穴の掘り方は0.5~0.8m前後である。深さは検出面から0.2~0.4mで、柱痕跡から柱の大きさは径0.2m前後といえる。床面積は24.8m²である。

遺物は、微細な須恵器片や土師器片が出土したが、図化できるものはなかった。ただし土師器には回転台を用いたものは含まれておらず、かなり間接的な根拠ではあるが8世紀の年代を考えていきたい。

柱穴列1 (図46)

調査区中央南側で検出された柱穴列で、建物5の側柱の位置とほぼ平行であることから、建物5に伴う目隠し塀と考えられる。遺構検出面は3.7m付近で、径0.2m前後の円形の掘り方を呈する。深さは検出面から0.2mほどで、径0.1mの柱痕跡が認められる。

遺物は極微細な土師器片が出土したのみである。

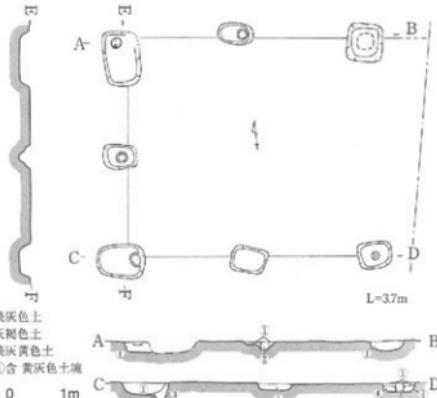


図44 建物8 実測図

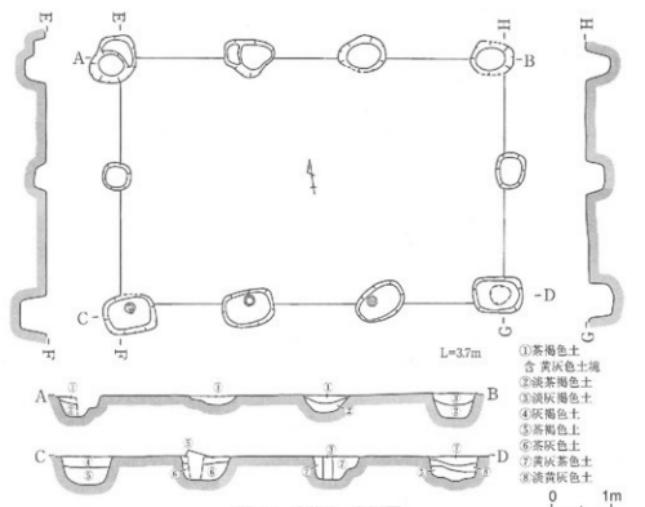


図45 建物9 実測図

柱穴列 2 (図47)

調査区中央西側で検出された柱穴列で、建物 5 に伴う目隠し塀と考えられる。遺構検出面は3.7m付近で、一辺0.7m前後の方形の掘り方である。深さは検出面から0.1~0.4mで、径0.2mの柱痕跡が認められる。

遺物は微細な土器片ばかりであるが、回転台を用いた丹塗り土師器の小片も含まれている。

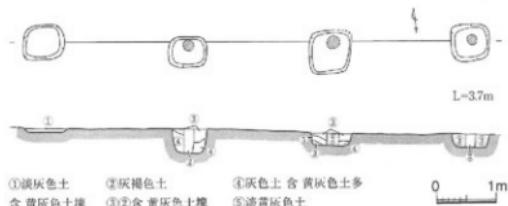


図46 柱穴列 1 実測図

柱穴列 3 (図48)

調査区中央西側で検出された柱穴列で、柱穴列 2 とは直交するため、同時存在は考えられない。建物 6 の西側の目隠し塀の可能性が高い。ただ、柱穴列の中央には柱穴が検出されず、2つの柱穴がセットになるような柱穴列となっている。同様の柱穴列は調査区北側で検出された柱穴列 7 と柱穴列 8 である。それぞれの柱穴列には単なる塀の機能以外も想定されるが、詳細については不明である。遺構検出面は3.7m付近で、一辺0.6m前後の方形プランの掘り方である。深さは検出面から0.2mほどである。

遺物は微細な土器片が出土したのみであった。

柱穴列 4 (図49)

調査区南東部で検出された柱穴列で、建物 6 に伴う目隠し塀と考えられる。建物 6 の東側には雨落ち溝と考えられる幅0.3m、長さ5.8m、深さ0.2mの細長い溝があり、その溝を埋めた後に柱穴列 4 を設定している。遺構検出面は3.7m付近で、一辺0.4~0.6mの方形プランの掘り方であるが、北端の柱穴のみのが抜き取られたためかやや不整形となっている。深さは遺構検出面から0.3mほどである。

遺物は須恵器と土師器の小片が若干出土したが、丹塗り土師器のなかには回転台を用いたものは含まれていない。

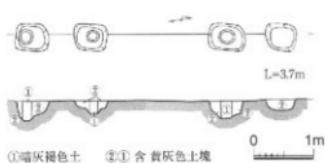


図47 柱穴列 2 実測図

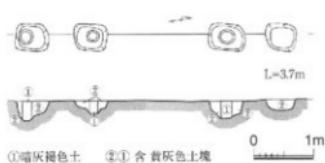


図48 柱穴列 3 実測図

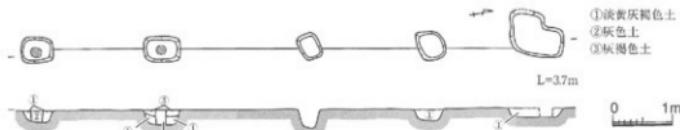


図49 柱穴列4 実測図

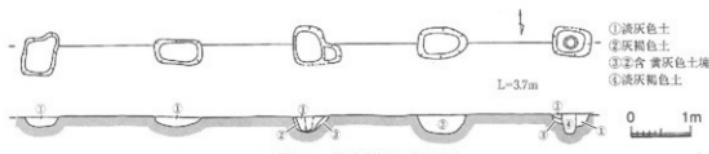


図50 柱穴列5 実測図

柱穴列5 (図50)

調査区北東部で検出された柱穴列で、古代の建物群の北側を画する柱穴列の可能性が高い。建物8の柱穴を切っていることから、8世紀中葉以降の時期と考えられる。遺構検出面は0.3m付近で、一辺0.7~0.8mの方形プランの掘り方であるが、東端と東から2つ目の柱穴には柱の抜き取り痕が認められる。また、径0.2mの柱痕跡が認められる柱穴もある。深さは遺構検出面から0.2~0.4mである。

遺物は須恵器と土師器の小片が若干出土したが、丹塗り土師器のなかには回転台を用いたものは含まれていない。

柱穴列6 (図51)

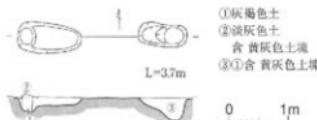


図51 柱穴列6 実測図

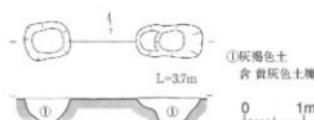


図52 柱穴列7 実測図

調査区北端で検出された柱穴列であるが、柱穴列7とセットになる可能性が高い。そうすると、柱穴列3と同様に、中心の柱穴が欠落する柱穴列といえる。遺構検出面は3.7m付近で、長さ1.0m、幅0.5mの長方形を呈する掘り方である。径0.2mほどの柱痕跡も認められる。深さは検出面から0.4mである。

遺物は微細な土器片が若干出土したのみである。



図53 柱穴列8 実測図

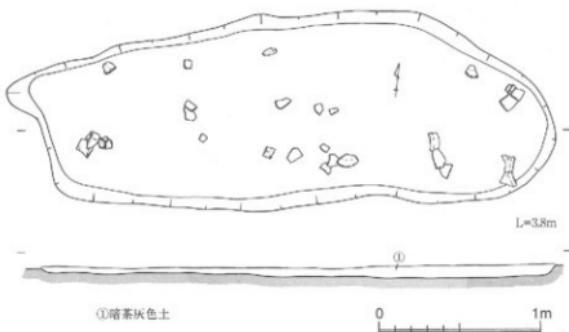


図54 P669 実測図

柱穴列7（図52）

調査区北端で検出された柱穴列であるが、柱穴列6とセットになる可能性が高い。そうすると柱穴列3と同様に中心の柱穴が欠落する柱穴列といえる。遺構検出面は3.7m付近で、長さ0.8~1.1m、幅0.5mの長方形を呈する掘り方である。深さは検出面から0.5mである。

遺物は微細な土器片が若干出土したのみである。

柱穴列8（図53）

調査区中央やや東寄りで検出された柱穴列であるが、建物6の北側に付属する目隠し塀と考えられる。遺構検出面は3.7m付近で、一辺0.5mほどの方形プランの掘り方である。深さは検出面から0.2mである。

遺物は微細な土器片が出土したのみである。

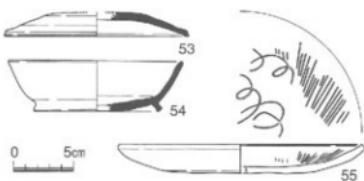


図55 P669 出土遺物

P669（図54・55）

調査区南西部で検出された土壤で、長さ3.2m、幅1.2mの不整形に近い長楕円形の平面形を呈する。遺構検出面は3.7m付近で、深さは検出面から0.1mである。断面形は台形で、埋土は1層である。建物5とは重複するが、P669の方が先行する時期である。

遺物は須恵器杯身(54)、杯蓋(53)、土師器皿(55)で、固化できなかったが、土師器の壺の胴部片も出土している。いずれも比較的の破片の大

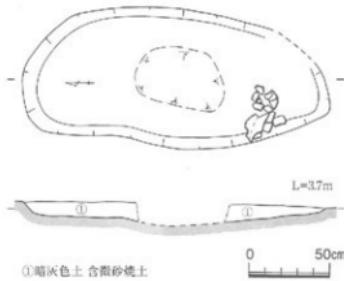


図56 P718 実測図

きさは大きいものの、埋納したというほどではない。土師器皿(55)は畿内からの搬入品である。時期は須恵器の杯身(54)は7世紀末まで遡る可能性が高いが、他の土器の年代は若干新しく、8世紀前半の時期といえる。

P718 (図56・57)

調査区中央南側で検出された土壤で、長さ1.8m、幅0.9mの長楕円形の平面形を呈する。遺構検出面は3.7m付近で、深さは検出面から0.1mである。断面形は中央に向かって緩やかな傾斜で深くなつており、壁面の傾斜は比較的急である。遺物は遺構内の南端でまとまって出土しており、完形に近

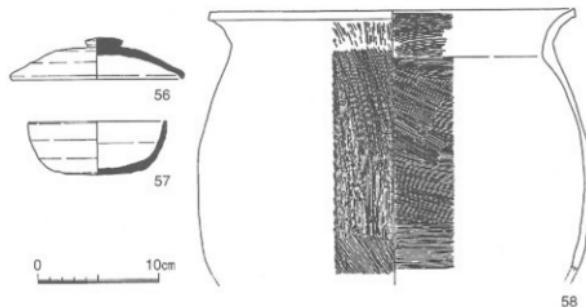


図57 P718 出土遺物



図58 P769 実測図

いものも含まれることから、本遺構が土壙墓で、その副葬品である可能性も多い。

遺物は須恵器杯蓋(56)、杯身(57)、土師器甕(58)である。時期は7世紀末で、古代の掘立柱建物よりも若干先行する時期といえる。

P769 (図58・59)

調査区南東コーナー付近で検出された土壙で、建物4の柱穴によ

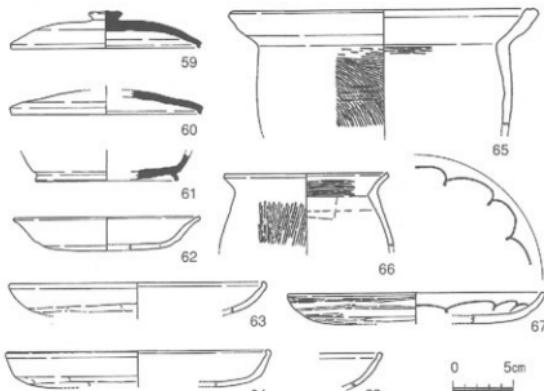


図59 P769 出土遺物

って切られている。東側は調査区外にでるため全形は不明であるが、長さ3.0m、幅1.5m以上の不整形、あるいは隅丸方形気味の平面形になる可能性が高い。埋土は、断面観察の結果2層が確認された。溝状の遺構と土壙が切り合っていることも想定したが、平面的には確認されず、遺物も遺構南北コーナー付近から北東部へ徐々に落ち込むような出土状況であったことから、同一遺構内の埋土の違いと考えられた。遺構検出面は3.7m付近で、深さは検出面から0.1mで平坦となり、北側ではそこから0.1mほど低くなっている。

遺物は須恵器杯蓋(59・60)、杯身(61)、土師器皿(62~64・67・68)、土師器甕(65・66)である。これらからこの遺構の時期は8世紀中葉よりの前半といえる。なお、土師器(63・64・67・68)は畿内からの搬入品である。

集石遺構1 (図60)

調査区南東部で検出された集石遺構で、建物1や建物6の内部に含まれる位置関係にある。したがって両建物の時期とは重ならないといえる。建物6の柱穴を検出した時点では石の上面は検出していなかった。石の出土状況から、長径0.8m、短径0.6mの長楕円形の土壙が想定されたが、土質等の相違か

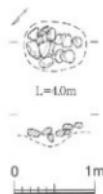


図60 集石遺構1 実測図

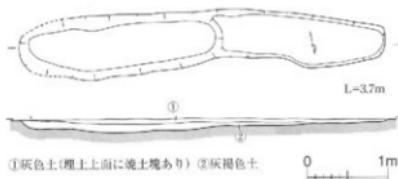


図61 溝2 実測図

らは土壤埋土の分離はできなかった。

石は長さが20cm弱ほどの河原石で、石以外の遺物は含まれていない。妹尾住田遺跡(草原2003)では古代の建物に対する宅鎮として、建物の周囲から集石遺構がいくつも検出されており、当遺構も同様のものであると考えられる。

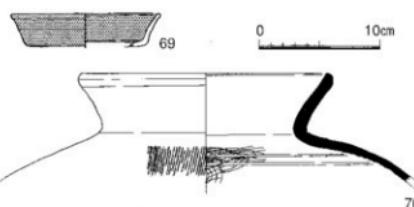


図62 溝2 出土遺物

溝2 (図61・62)

調査区中央西寄りで検出された溝状遺構で、柱穴列3によって一部削平されている。建物5の北側には平行し、長さもほとんど同じであることから、建物5に伴う溝と考えられる。遺構検出面は3.7m付近で、断面形は皿状を呈する。埋土は2層あり、上層には焼土が多数含まれる。建物5の焼失とともに埋没したことを示唆している。

埋土には焼土塊が多く認められるわりに遺物は少なく、図化できたのは土師器杯(69)と須恵器壺、もしくは横瓶(70)だけである。

包含層 (図63~67)

包含層から出土した遺物は出土時の層位関係から、中世の遺構面精査後に包含層を掘り下げた際に出土したものと、古代包含層出土遺物、遺構面を精査し遺構を検出する時点で取り上げた遺物を古代遺構面出土遺物とした。古代遺構面出土遺物については、柱穴などの遺構の位置と重なるものが多く、本来は柱穴などの各遺構の埋土に伴っていた可能性が高い。

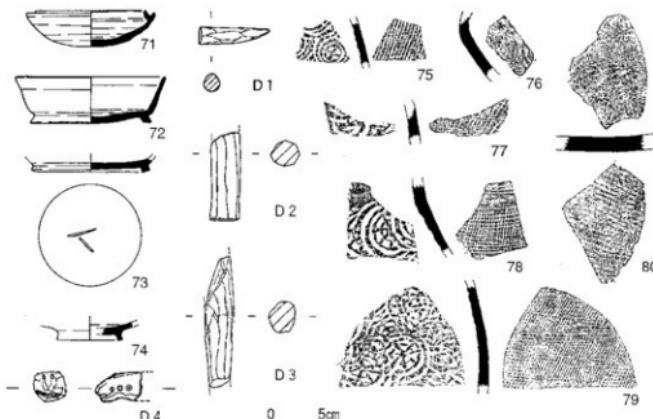


図63 古代包含層出土遺物(1)

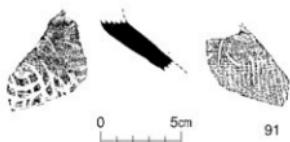


図64 古代包含層出土遺物(2)

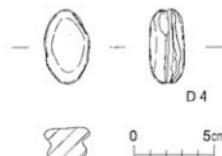


図65 古代包含層出土遺物(3)

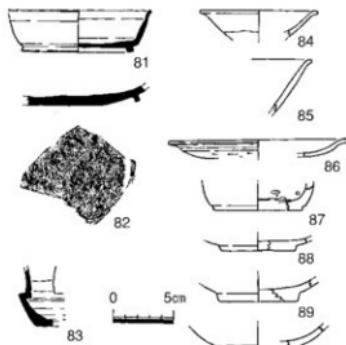


図66 古代造構面出土遺物(1)

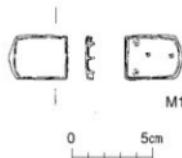


図67 古代造構面出土遺物(2)

遺物はヘラ記号のある杯身(73・82)などの須恵器と、車輪文タタキのある須恵器甕あるいは壺の胴部片(75・77~79)や、絵画の線刻と思われるもの(76)、「小」の字の刻みが認められる胴部片(91)などや、緑釉陶器(84~90)、土錐(D 4)、銅製帶金具(M 1)である。緑釉

陶器はほとんどが京都産であるが、猿投産の袋物(87)のような出土例が稀なものも含まれている。帶金具とともに、古代造構面の性格を知る手掛かりとなるものである。そのほか多くの土器が出土したが、大半は6世紀後半から7世紀初頭にかけてのもので、古墳時代の造構面に伴うものばかりである。そのほか、猿面鏡ではないかと思われる須恵器片(80)、土馬の尻尾と思われる土製品(D 1)、何らかの動物を模した土製品の脚と思われるもの(D 2・D 3)も出土した。(D 4)はかなりデフォルメされているが、土馬頭部の可能性が高い。

4 古墳時代後期（6・7世紀）（図68）

古墳時代後期の造構は、造構検出面のレベル差や層位差からは分離できなかつたが、5世紀末～6世紀初頭、6世紀中葉～後半と、6世紀末～7世紀前半の3時期に分けてとらえることができる。5世紀末～6世紀初頭は、堅穴住居が2軒の単発的な集落であったが、6世紀後半は堅穴住居数軒の住居がまとまる単位が調査区内で2単位認められた。6世紀末～7世紀前半になると、その単位が掘立柱建物へと変わり、しかも単位ごとの占有空間を囲む溝があり、建物の配置も棟方向を平行、もしくは直交にするなど規則的となる。単位そのものには変動がなかった可能性が高いが、住居様式に大きな変化があったといえる。出土遺物としては、多くの土器とともに鉄製品が比較的認めら

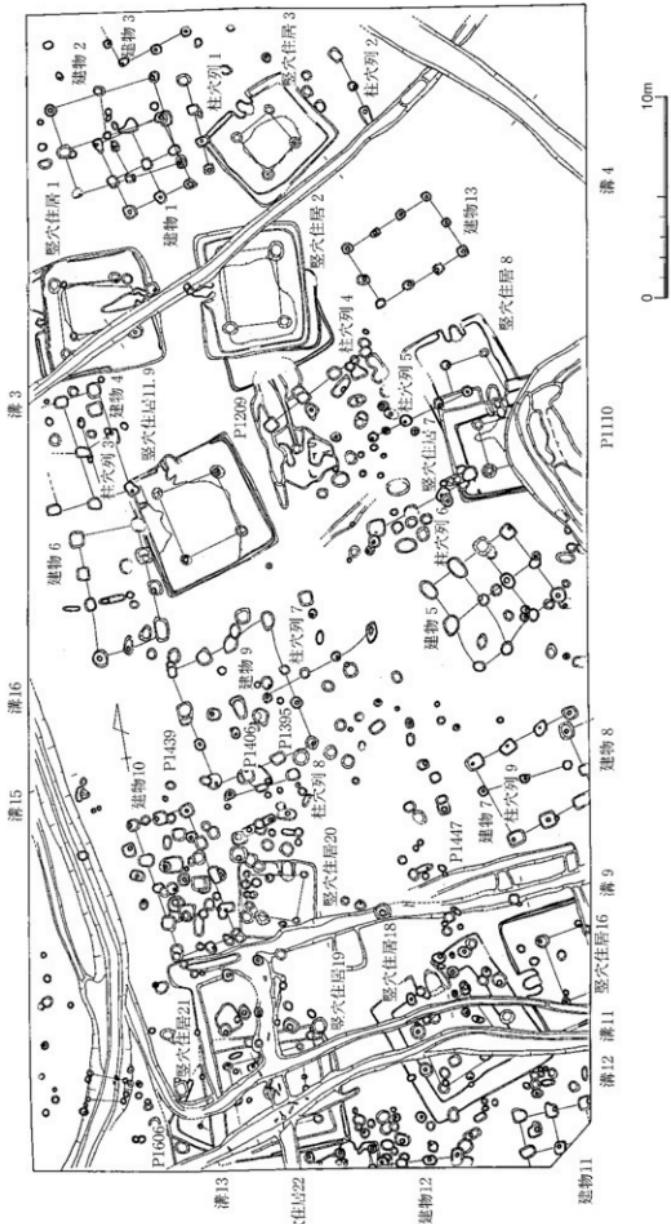


図68 古墳時代後期（6・7世紀）遺構面

れ、鉄滓やフイゴ羽口も出土していることから、集落内で鉄生産がおこなわれたことがうががえる。さらに製塩土器や馬の骨なども出土している。

竪穴住居 1a・b (図69~72)

調査区北西部で検出された竪穴住居で、ほとんど重複して切り合っていたため、分離して掘り下げる完全にはできなかった。基本的には2軒別々の住居であったが、a・bの小文字を冠して遺構名とした。

まず竪穴住居 1aは、一辺約5.9mの隅丸方形の平面プランを呈す。内側外周には幅約0.2m、床面からの深さが約4cmの壁帶溝が途切れながらもめぐっている。遺構検出面は3.7m付近で、床面までの深さは検出面から0.18mである。床面は住居中央付近で、長さ約3.6m、幅約2.4m、高さ約5cmほどの平面方形のテーブル状に高くなつた部分が認められる。この部分は床面を掘り下げた際の地山を残して整形されたものである。ただ、カマドの焚き口に相当する部分については、幅0.6m、長さ4

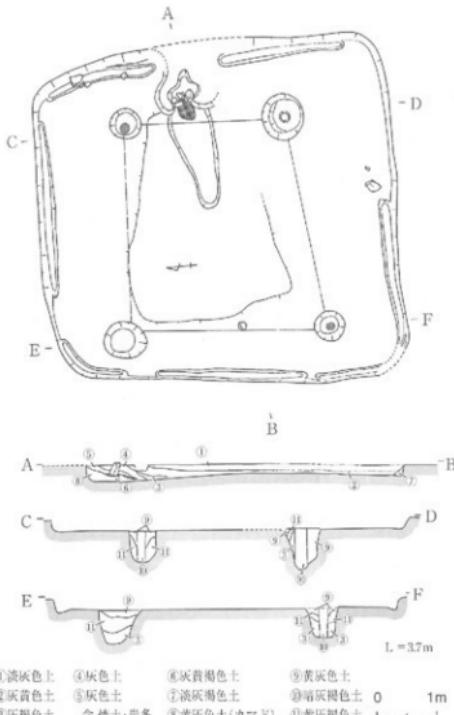


図69 竪穴住居1a実測図

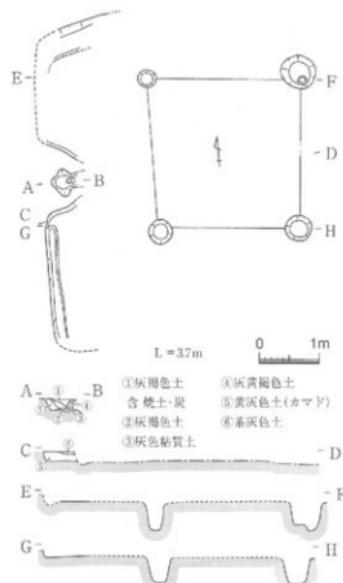


図70 竪穴住居1b実測図

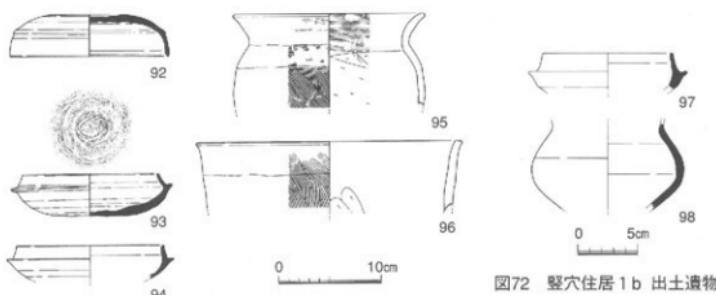


図71 壁穴住居1a出土遺物

mの長楕円形に深さ5cmほど掘り下げている。カマドは東側の中央、やや北寄りに付設されている。上部は削平され、下半部のみが残存していた。煙道部等は不明である。幅1.0m以上、高さ0.25mの規模で、地山とよく似た黄灰色土で構築されている。燃焼部は長径0.4m、短径0.25mの長楕円形に床面が焼土化している。袖部内側も被熱により赤化している。燃焼部の東端には、河原石が立てられており、燃焼部側は被熱により赤化しており、カマドの支脚と考えられる。柱穴は4つ検出され、径0.4~0.6mの円形の平面形を呈し、径0.16mほどの柱痕跡が認められる。柱穴間の距離は東西で3.4m、南北で2.6~3.4mである。

遺物は須恵器杯蓋(92)、杯身(93)がカマド北側の壁帶溝上面から、土師器壺(95)、瓶(96)がカマド内の支脚周辺から、須恵器杯身(94)は埋土中から出土した。これらから壁穴住居1aの時期は6世紀中葉といえる。

壁穴住居1bは、わずかに西端部のみが検出できただけで、大半は壁穴住居1aによって削平され

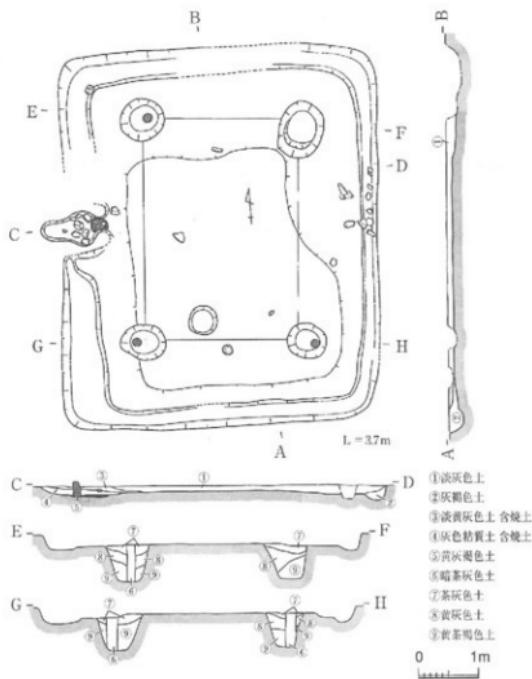


図73 壁穴住居2a 実測図

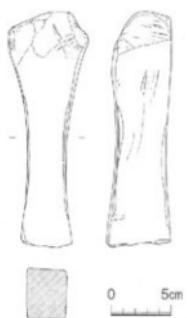


図74 竪穴住居2a 出土遺物

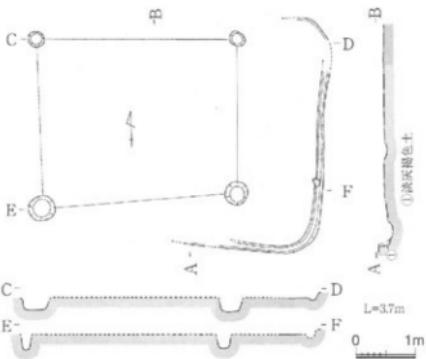


図75 竪穴住居2b 実測図

ている。残存部だけからの所見であるが、一辺5.4m前後の方形のプランであったと推測される。カマドを挟んで南側には幅0.2m、床面からの深さは3cm、北側には幅0.45m、床面からの深さは3cmの壁帯溝が認められる。柱穴は4つ検出され、径0.25~0.5mの円形の平面形を呈し、径0.1mほどの柱痕跡が認められるものもある。柱穴間の距離は、北側の東西方向で2.5m、南側の東西方向で2.3m、東側の南北方向で2.4m、西側の南北方向で2.5mである。カマドは西側中央付近で地山とよく似た黄灰色土で構築されており、支脚と考えられる河原石が直立した状態で検出された。

遺物は少ないが、須恵器杯身(97)はカマドの北側の床面上、須恵器壺(98)は南側付近の埋土中から出土した。いずれも小片であるが、6世紀中葉の範疇に入るものといえる。

竪穴住居2a・b・c (図73~77)

調査区中央北半で検出された竪穴住居で、ほぼ同じ位置で3軒が重複している。いずれも別々の住居であるが、完全に分離して掘り下げることが出来なかつたため、a・b・cの小文字を冠して遺構名とした。

まず竪穴住居2aは、北半部分を溝3によって貫通されているが、ほぼ全形をうかがうことが出来

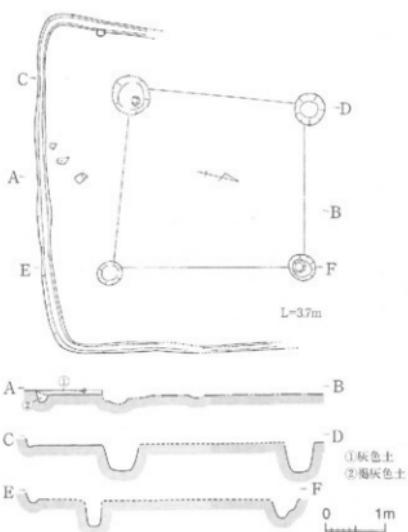


図76 竪穴住居2c 実測図

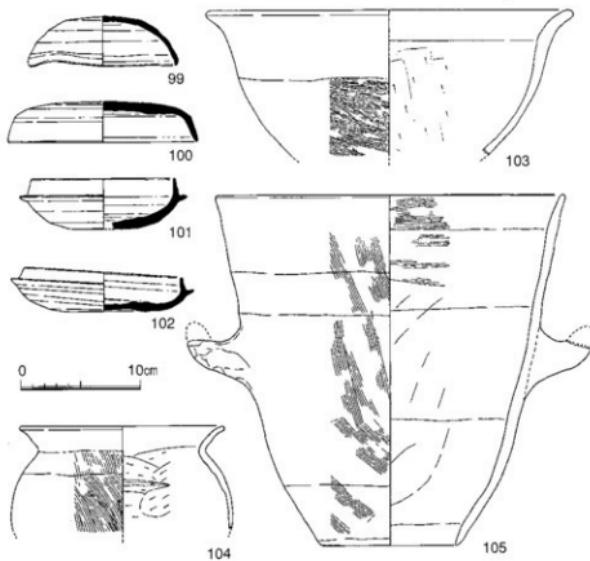


図77 壁穴住居 2a・b・c 出土遺物

る。南北方向の長さが6.25m、東西方向の長さが5.2mの方形を呈する平面形で、西側面の中央付近にカマドが付属する。内側外周には、幅0.3~0.6m、床面からの深さが5cmほどの壁帶溝がめぐっている。遺構検出面は3.7m付近で、床面までの深さは検出面から0.12mである。床面は住居の中央付近で長さ3.8m、幅3.4mの方形のプランで、テーブル状に4cmほど高くなっている。この部分は床面の地山を削り残して整形されている。カマドは北側の袖部が削平されているが、そのほかは比較的良好に残存している。幅0.8m以上、高さ0.1mの規模で、地山とよく似た黄灰色土で構築している。燃焼部は、径0.3mほどの円形状に床面が焼土化しており、その西端部には河原石が立てられている。河原石の燃焼部側の面は被熱により赤化していることから、カマドの支柱であったといえる。柱穴は4つ検出され、径0.7~0.9mの円形の平面形を呈し、深さは検出面から0.2m前後、径0.2mの柱痕跡も認められる。ただし、北東コーナー部分の柱穴については、柱痕跡が認められず平面形がやや南西方向に張り出し気味であることから、柱を抜き取った可能性が高い。柱穴間距離は、北側の東西方向で2.6m、南側の東西方向で2.9m、西側の南北方向で3.8m、東側の南北方向で3.6mである。

遺物は、須恵器杯身(102)、土師器甕(104)は、東側中央付近の床面から壁帶溝上面でまとめて出土した。須恵器杯蓋(99)は南側中央付近の床面上から、土師器鍋(103)、甕(105)はカマド内から出土した。これらの遺物から壁穴住居 2aの時期は6世紀後半から末といえる。

壁穴住居 2bはわずかに東側の端部が検出できただけであるが、一辺4.0~6.0mの方形のプランが推測される。遺構検出面は3.7m付近で、床面までの深さは検出面から0.1mである。幅0.16m、床面からの深さが0.05mの壁帶溝が外周をめぐっている。壁穴住居 2aの床面からはいくつかの柱穴が検

出され、そのうち竪穴住居2bのプランにはほぼ方向性が合致する柱穴があったことから、それらを竪穴住居2bの柱穴とした。柱穴間距離は北側の東西方向で3.04m、南側の東西方向で2.8m、東側の南北方向で2.24m、西側の南北方向で2.4mである。

遺物は少なく、須恵器杯蓋(100)が東側の壁帶溝土面から出土した。これから竪穴住居2bの時期は6世紀中葉よりの後半の時期といえる。

竪穴住居2cは大半が竪穴住居2aによって削平されており、わずかに検出された部分から、一辺5m程の方形の平面形がうかがわれる。造構検出面は3.7m付近で、床面までの深さは8cmである、幅0.16m、床面からの深さが0.1mの壁帶溝が外周をめぐっている。竪穴住居2aの床面を精査時にいくつかの柱穴が検出され、そのうち竪穴住居2cのプランに平行して並ぶものを柱穴としてとらえた。柱穴間距離は北側の東西方向で2.16m、南側の東西方向で2.4m、東側の南北方向で2.8m、西側の南北方向で2.4mである。柱穴の平面形は径0.4~0.5mの円形で、深さは検出面から0.3~0.4mで、径0.2mの柱穴跡が認められるものもある。

遺物は南側中央付近の床面から、須恵器杯身(101)が出土した。これから竪穴住居2cの時期は6世紀中葉といえる。

竪穴住居3（図78～80）

調査区北端中央付近で検出された竪穴住居

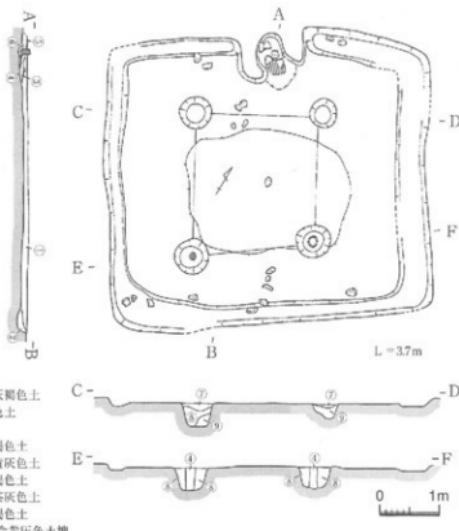


図78 竪穴住居3 実測図

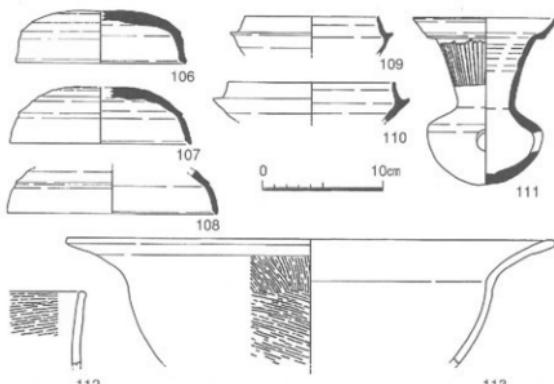


図79 竪穴住居3 出土遺物(1)

である。南北の長さが4.75m、東西の長さが5.32mの方形の平面形を呈する。北側面の中央付近にカマドが付属する。内側外周には幅0.3~0.5m、床面からの深さが0.08mの壁帶溝がめぐる。造構検出面は3.6m付近で、床面までの深さは検出面から0.08mである。床面は住居中央付近で、長さ2.7m、幅1.9mの隅丸方形のプランでテーブル状に0.04mほど高くなっている。この部分は床面の地山を削り残して整形している。カマドは幅1.1m、高さ0.08mの規模で、地山とよく似た淡黄灰色土で構築している。燃焼部は径0.3mの円形状に床面が焼土化しており、その北端には河原石が立てられている。河原石の燃焼部側は被熱により赤化しており、カマドの支脚であったといえる。柱穴は4つ検出され、径0.5~0.55mの円形の平面形で、深さは床面から0.2~0.4m、径0.15mの柱痕跡の認められるものもある。柱穴間距離は北側の東西方向で1.6m、南側の東西方向で2.0m、東側の南北方向で1.6m、西側の南北方向で1.8mである。

遺物は、土師器の瓶(112)、鍋(113)はカマド内から、須恵器の甕(111)はカマド前面の床面上から、須恵器杯蓋(106~108)、杯身(109・110)は南端の床面上から壁帶溝上面にかけて出土した。また、埋土から擦り石(図80)が出土した。

これらから竪穴住居の時期は6世紀中葉といえる。

竪穴住居7 (図81~83)

調査区中央東側で検出された竪穴住居である。壁帶溝の痕跡から一辺4mほどの方形プランの住居の北側と西側を拡張して、一辺5.6mの方形プランの竪穴住居にしている。その際、北側中央付近にあったカマドを北側にスライドさせて作り直している。現況では、当初のカマドの袖端部と燃焼部が残存していた。ただしこの部分は壁帶溝と同じく、拡張した際に埋められていた。柱穴については精査したにもかかわらず、4本しか検出できなかったことから、拡張前の柱をそのまま再利用したと考えられる。拡張後の竪穴住居の検出面は3.7m付近で、床面までの深さは検出面から0.2mである。北側中央に付近に付属するカマドの両側には幅0.6m、床面からの高さが0.1mほどのベッド状

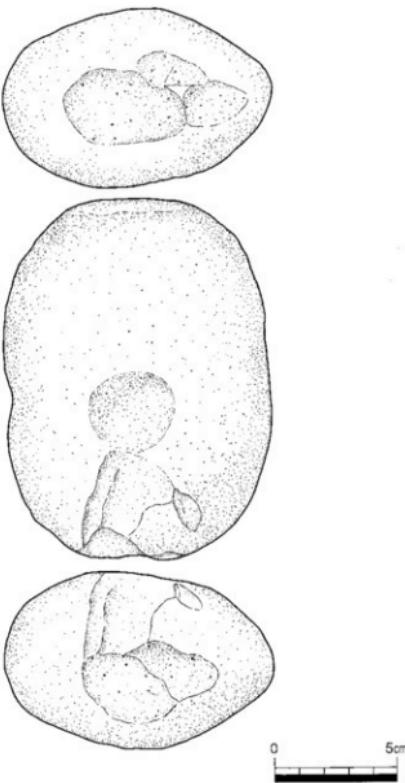


図80 竪穴住居3 出土遺物(2)

の段が認められる。当初は拡張前の竪穴住居の外周部とも想定したが、カマド埋上との関係や、掘り下げ時の精査から拡張後のものと理解された。カマドは幅1.4m、高さ0.1mの規模で、地山とよく似た黄灰色土で構築している。燃焼部は径0.2mの円形状に床面が焼土化しており、その北端には河原石が立てられている。河原石の燃焼部側は被熱により赤化しており、カマドの支脚であったといえる。柱穴は4つ検出され、径0.6~0.7mの円形のプランで、深さは床面から0.7m前後である。柱穴間距離は北側の東西方向で

2.2m、南側の東西方向で
2.48m、東側の南北方向で
1.7m、西側の南北方向で
1.68mである。

遺物は須恵器杯蓋(114)、
杯身(115)が西側の床面上、
土師器鉢(116)が埋土、土師器甕(117・118)がカマド内
から出土した。埋土から出土した鋸鍛車(D 1)は、弥生土器の甕の胸部片であり、
古い時期の遺物の混入といえる。これらから竪穴住居
の時期は6世紀末といえる。

竪穴住居8(図84・85)

調査区中央東側で検出さ
れた竪穴住居である。南北
は竪穴住居7によって切ら
れている。東西が4.4m、南
北が4.8m以上の長方形の平

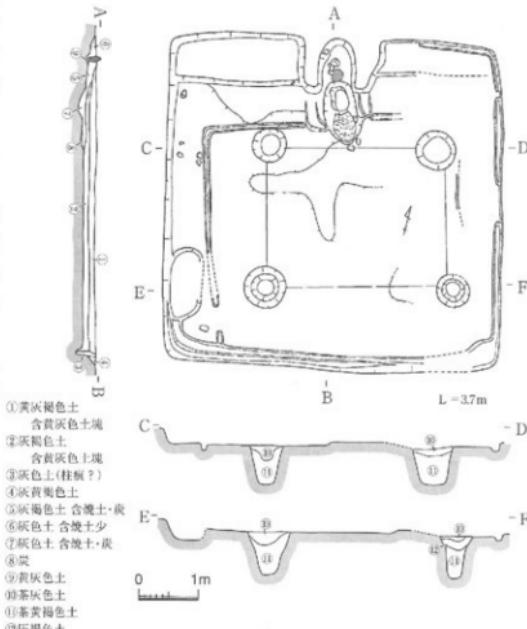


図81 竪穴住居7 実測図

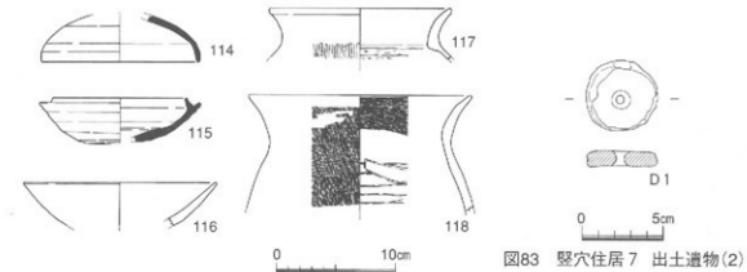
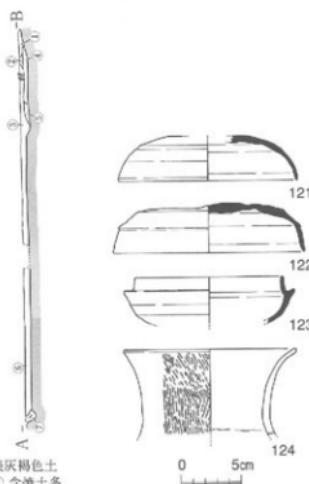
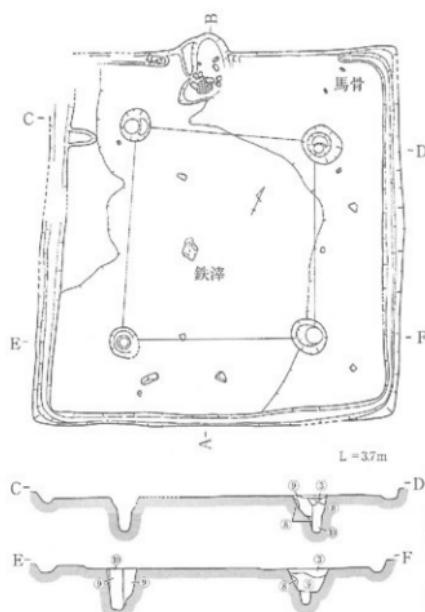
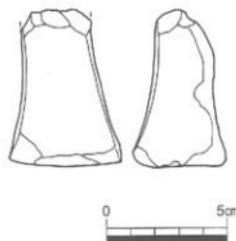
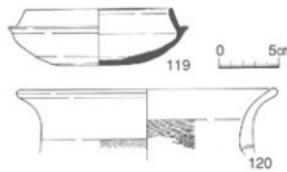
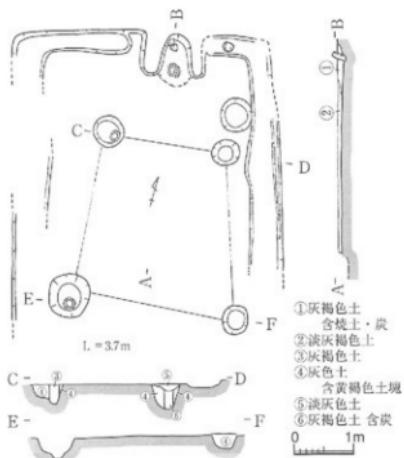


図82 竪穴住居7 出土遺物(1)

図83 竪穴住居7 出土遺物(2)



面形である。遺構検出面は3.7m付近で、床面最深部間までの深さは0.06mである。外周には幅0.3~0.6mのやや幅広の壁帶溝がめぐっている。カマドは、北側中央よりやや東側に付属しており、幅1.0m、高さ0.06mの規模である。地山とよく似た黄灰色土で構築されている。燃焼部は径0.2mの円形状に床面が焼土化しており、その北端から0.2mほど北側に河原石が立っている。河原石の燃焼部側は被熱により赤化しており、カマドの支脚であったといえる。柱穴は4つ検出され、径0.4~0.8mの円形プランで、深さは床面から0.2~0.4mである。柱穴間距離は北側の東西間で1.4m、南側の東西間で2.2m、東側の南北間で2.2m、西側の南北間で2.1mである。

遺物は、土師器壺(120)がカマド内から、須恵器杯身(119)がカマド東側の壁帶溝上面から出土した。これらから竪穴住居の時期は6世紀中葉といえる。

竪穴住居9 (図86~88)

調査区中央やや西寄りで検出された竪穴住居である。南北の長さが7.8m、東西の長さが6.1mの長方形の平面形を呈する。北側面の中央付近にカマドが付属する。遺構検出面は3.7m付近で床面までの深さは4cmである。外周には幅0.2~0.4m、床面からの深さが0.05mの壁帶溝がめぐっている。カマドは東側の袖部が削平を受けているが、残存部から幅1.0m、高さ0.08mの規模である。地山とよく似た黄灰色土で構築されている。燃焼部は径0.2mの円形状に床面が焼土化しており、北端部には河原石が立っている。河原石は燃焼部側の被熱により赤化しており、カマドの支脚であったといえる。柱穴は4つ検出され、径0.4~0.7mの円形プランで、深さは床面から0.6m前後である。径0.18~0.2mの柱痕跡が認められるものもある。柱穴間距離は北側の東西で2.5m、南側の東西で2.5m、東側の南北で2.6m、西側の南北で3.1mである。

遺物は、カマド内から土師器壺(124)、須恵器杯蓋(121・122)が北東コーナー部の柱穴埋土から、須恵器杯身(123)が出土した。このほか、住

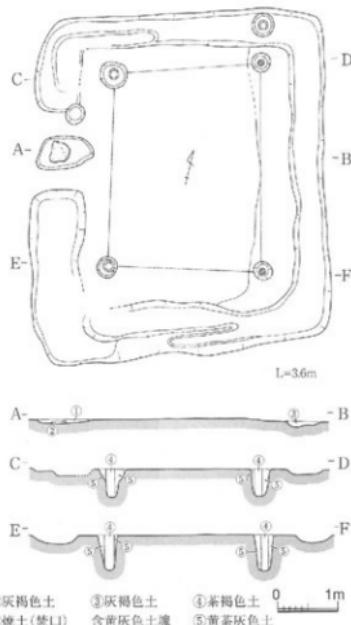


図89 竪穴住居11 実測図

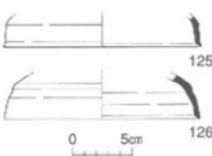


図90 竪穴住居11 出土遺物

居中央部の床面上から鉄滓と砾石（図87）が、北東コーナー付近の埋土中からは馬骨片が2点出土した。出土した土器から竪穴住居9の時期は6世紀中葉から後半といえる。

竪穴住居11（図89・90）

調査区中央やや西寄りで、竪穴住居9と全く重複して検出された竪穴住居である。ただし、カマドの位置は竪穴住居9が北側であるが、竪穴住居11が西側に付属しており異なる。遺構検出面は3.4m付近で、壁帶溝とカマド燃焼部、柱穴のみが残存している。残存部から南北5.8m、東西5mの方形の平面形がうかがえる。壁帶溝は幅0.6~1.0m、深さは検出面から0.1

mである。部分的に深くなっているが、それが掘り直された痕跡であるのかどうかについては不明で、少なくとも柱穴には建て替えを示す柱穴は検出されなかった。カマドは長さ0.9m、幅0.5mの長方形に床面を掘りくぼめ、中央付近の床面が径0.18mほどの円形に焼土化している。柱穴は4つ検出され、径0.4m前後の円形プランで、深さは床面から0.6m前後である。径0.16mの柱痕跡が認められる。柱穴間距離は北側の東西で2.1m、南側の東西で2.3m、東側の南北で3.2m、西側の南北で2.8mである。

遺物は極めて少なく、壁帶溝の埋土中から須恵器の杯蓋(125・126)片が出土したのみである。これらの遺物から竪穴住居11は6世紀中葉といえる。

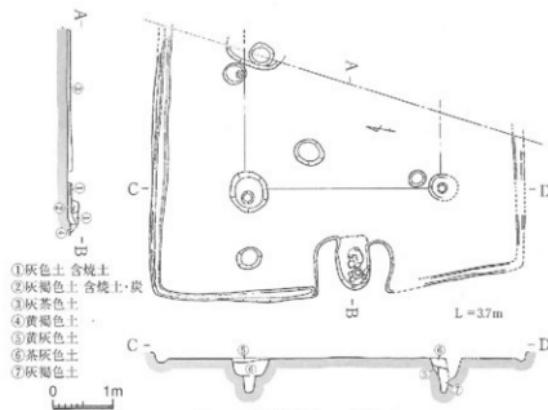


図91 竪穴住居16 実測図

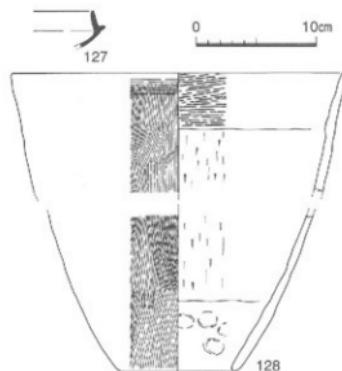


図92 竪穴住居16 出土遺物

竪穴住居16（図91・92）

調査区南東部で検出された竪穴住居で、東半は調査区外へ出るため不明である。南北6.2m、東西4.5m以上の方形プランが想定される。西側の中央

付近にカマドが付属している。遺構検出面は3.6m前後で、床面までの深さは0.08mである。外周には幅0.3m、床面からの深さが0.05mの壁帶溝がめぐっている。カマドは幅1.3m、高さ0.08mの規模で、地山とよく似た黄灰色土で構築している。燃焼部は径0.2mの円形に床面が焼土化しており、その西端には河原石が立っている。河原石の燃焼部側は被熱により赤化しており、カマドの支脚であったといえる。柱穴は2つ検出され、径0.4~0.6mの円形プランで、深さは床面から0.6mである。径0.2mの柱痕跡が認められる。柱穴間距離は2.6mである。

遺物は、土師質土器の瓶(128)はカマド内から、須恵器杯身(127)は床面上から出土した。これらの遺物から、当住居の時期は6世紀後半といえる。

竪穴住居18(図93・94)

調査区南東コーナー付近で検出された竪穴住居である。東西の長さが6.5m、南北の長さが7.1mの長方形の平面形を呈する。北側中央付近にカマドが付属する。遺構検出面は3.5m付近で、床面までの深さは0.08mである。壁帶溝は検出されなかった。中央付近は南北の長さが5m、東西の長さが4.5mの長方形の平面形で、床面からの高さが0.04mほどテーブル状に高くなっている。この部分と外周部分

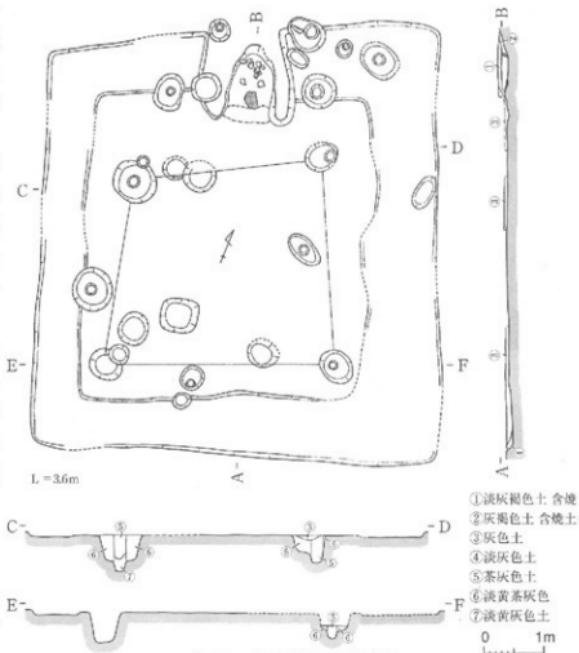


図93 竪穴住居18 実測図

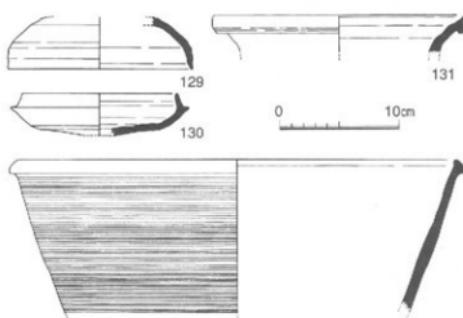


図94 竪穴住居18 出土遺物

の間は幅が0.8m~1.2mの溝状になることから、これが壁帶溝に相当するのかもしれない。カマドは幅1.6m、高さ0.08mの規模で、地山とよく似た黄灰色土で構築されている。燃焼部は径0.2mの円形状に床面が焼成化している。カマドからは土師器壺の胴部片が出土したが、河原石を用いた支脚などは出土しなかった。柱穴はいくつか検出されたが、深さが0.2m以上であるのが4つ検出され、それぞれ埋土もよく似ていることから、この住居の柱穴と考えられる。径0.6~0.8mの円形のプランで、深さは床面から0.5m前後である。径0.2mの柱痕跡が認められるものもある。柱穴間距離は北側の東西で2.4m、南側の東西で3.2m、東側の南北で2.9m、西側の南北で2.4mである。

遺物は須恵器杯蓋(129)、杯身(130)がカマド前面の床面上から、須恵器壺(131)、壺(132)が埋土中から出土した。これらのうち最も新しいのが杯身(130)で、6世紀後半であり、当住居の時期と考えられる。

豎穴住居19 (図95・96)

調査区南端中央付近で検出された豎穴住居である。南北6.0m、東西6.7mの方形の平面形である。全形は大体把握できるが、溝によってかなり削平を受けており、細部については明確でない点がある。遺構検出面は3.5m付近で、床面までの深さは検出面から0.1mである。カマドは袖部と考えられる部分とその周辺から炭や焼土がまとまって検出されたことから、北側中央部に付属していたと考えられる。外周には幅0.3m、床面からの深さが0.08mの壁帶溝が部分的に認められる。住居中央部は南北4.6m、東西5mの方形の平面形で、高さ0.05mほどのテーブル状に高く

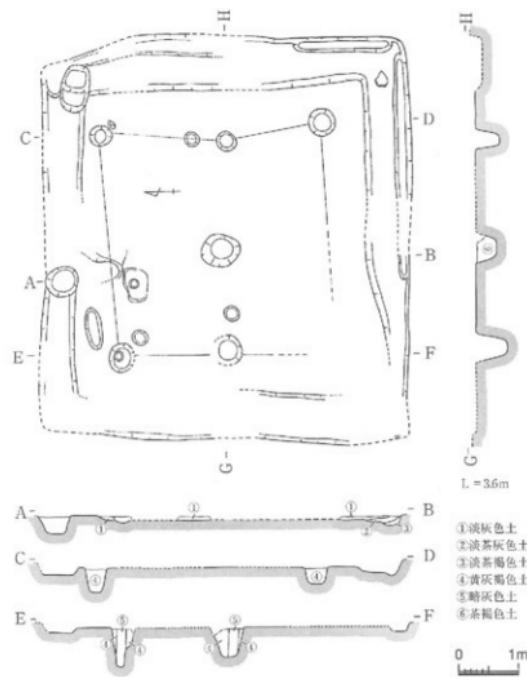


図95 豊穴住居19 実測図

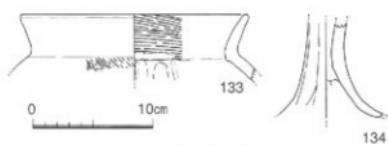


図96 豊穴住居19 出土遺物

なっている。この部分は地山を削り残して整形している。柱穴はいくつか検出されたが、深さが0.3mを越えるものは5つで、そのうち方形に並ぶものは4つである。その4つは埋立的にも似ており、堅穴住居19の柱穴と考えられる。ただし、南西コーナー部分は削平されて残存していないかった。柱穴間距離は東側の南北で3.2m、北側の東西で3.3mである。

遺物は極めて少なく、図化できたのは土師器が2点(133・134)だけである。このほか須恵器杯蓋の小片もある。土師器壺(133)は体部が球形となるやや古い時期も想定されるが、出土している須恵器片の中には、それ程古い特徴を持つものはない。当住居の時期を決めるのにはあまり積極的な根拠はないが、6世紀後半前後の時期と考えておきたい。

堅穴住居20(図97・98)

調査区中央やや南寄りで検出された堅穴住居である。南東コーナー付近は溝によって削平されている。残存部から南北3.8m、東西3.4mの方形の平面形といえる。遺構検出面は3.6m付近で、床面までの深さは検出面から0.16mである。壁帶溝は検出されなかつた。カマドは北側のやや東寄りに付属している。幅0.8m、高さ0.16mの規模で、地山とよく似た黄灰色土で構築している。燃焼部は径0.2mの円形状に床面が焼成化しており、その上面から土師器壺片が出土した。その北端には河原石が立っており、燃焼部

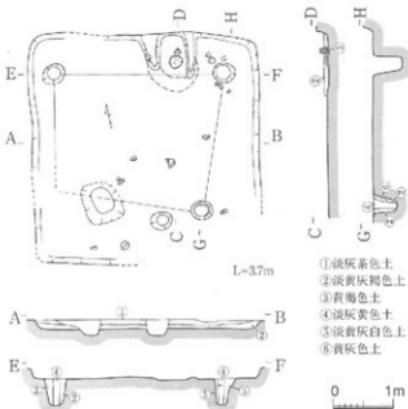


図97 堅穴住居20 実測図

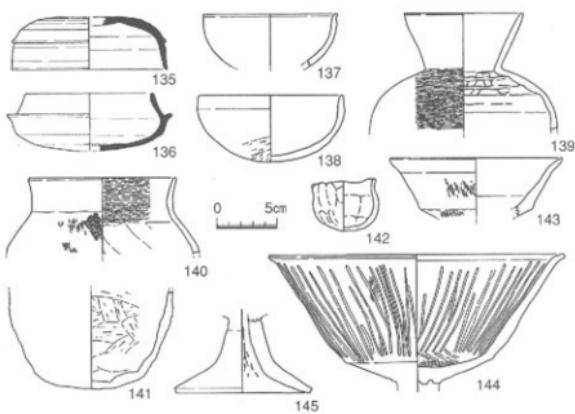


図98 堅穴住居20 出土遺物

側が被熱により赤化していることから、カマドの支脚であったといえる。柱穴は3つ検出され、南西コーナー部については上面からの柱穴により削平されている。柱穴の平面形は径0.4m前後の円形で、深さは床面から0.4m、径0.1mの柱穴痕が認められる。柱穴間距離は、北側の東西で2.5m、東側の南北で1.9mである。

遺物は土師器の壺(140・141)がカマド内、ほかは床面から出土した。これらから竪穴住居20の時期は5世紀末～6世紀初頭といえる。ほかの住居と比べかなり古いといえる。

竪穴住居21 (図99・100)

調査区南西コーナー付近で検出された竪穴住居である。大半は竪穴住居19によって削平されており、わずかに北西コーナー付近のみが検出された。それによると長さ4m以上の方形の平面形が推測され、外周には幅0.4m前後の壁帶溝がめぐっている。遺構検出面は3.5m付近で、床面までの深さは0.02mである。壁帶溝の深さは床面から0.05mである。柱穴は2つ確認され、径0.2mの円形の平面形で、径0.1mの柱痕跡が認められる。柱穴間距離は2.5mである。

遺物は手づくり土器(146)1点と、土師器の小片のみである。時期を決めるには極めて脆弱な根拠であるが、6世紀後半と考えられる竪穴住居19に削平されていることや、土師器にやや古相の特徴が認められることから、竪穴住居20と同じ5世紀末～6世紀初頭の時期と推測される。

竪穴住居22 (図101・102)

調査区中央南側で検出された竪穴住居である。大半は調査区外へ出るため、全形は不明であるが、一辺3.4m以上の方形の平面形を呈するようである。竪穴住居19によって一部を削平されている。遺構検出面は3.5m付近で、床面までの深さは0.1mである。壁帶溝は最大幅が0.5mで、深さは床面から0.05mである。残存状況がよくないが、カマドも検出されている。幅1.2m、高さ0.1mの規模で、わずかに床面が焼土化した部分が認められることから、これが焚口と考えられる。

遺物は埋土から須恵器壺(147)が出土しており、体部が小型化していることからも6世紀後半前後の時期といえる。

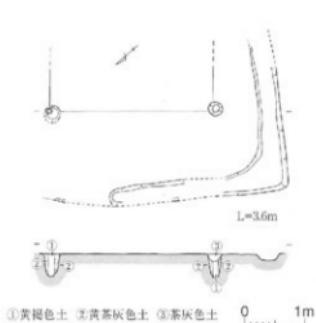


図99 竪穴住居21 実測図



図100 竪穴住居21 出土遺物

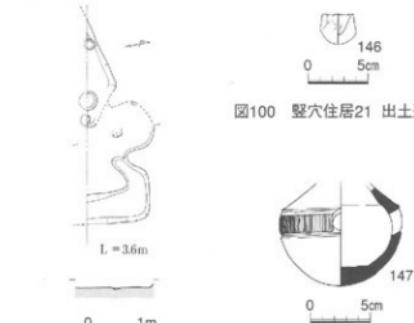


図101 竪穴住居22 実測図

図102 竪穴住居22 出土遺物

建物 1 (図103)

調査区北東コーナー付近で検出された総柱建物である。桁行2間、梁間2間の柱構成で、軸方向はN-12°-Wである。同様の総柱建物である建物2とはほぼ同じ地点で重なることから、建物1と建物2は同じ建物の建て替えである可能性が高い。柱穴の切り合い関係から、建物1→建物2の順といえ、建て替えによって床面積が拡大している。遺構検出面は3.6m付近である。柱穴の掘り方は基本的に方形で一辺0.4~0.6mであるが、なかには柱の抜き取り穴が認められるものもある。柱の大きさは、柱痕跡から径0.16m前後である。床面積は12.2m²である。

遺物は微細な土器片ばかりで図化できなかった。

建物 2 (図104)

調査区北東コーナー付近で検出された総柱建物である。桁行2間、梁間2間の柱構成で棟方向はW-6°-Sである。柱穴の切り合い関係から建物1の建て替えといえる。遺構検出面は3.6m付近である。柱穴の掘り方は基本的に方形であるが若干円形を呈するものも認められる。一辺0.4~0.7m、径0.5m前後である。南東コーナーの柱穴には、柱がそのまま残存しており、樹種(附章参照)などがあきらかとなった。径は0.2mで、横断面は円形、表面は丁寧に加工してあった。床面積は24.2m²である。

遺物は微細な土器片ばかりで図化できなかった。

建物 3 (図105)

調査区北西コーナー付近で検出された掘立柱建物である。桁行1間以上、梁間2間の柱構成で、大半は調査区外へ出るため全形は不明である。棟方向はN-18°-Wである。建物1の軸方向とも

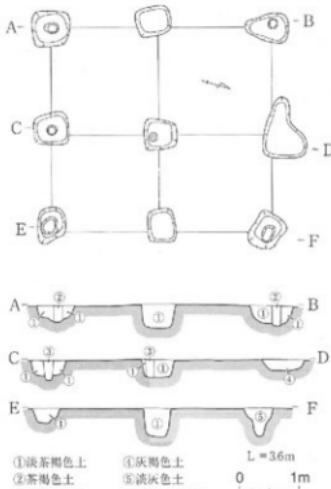


図103 建物1 実測図

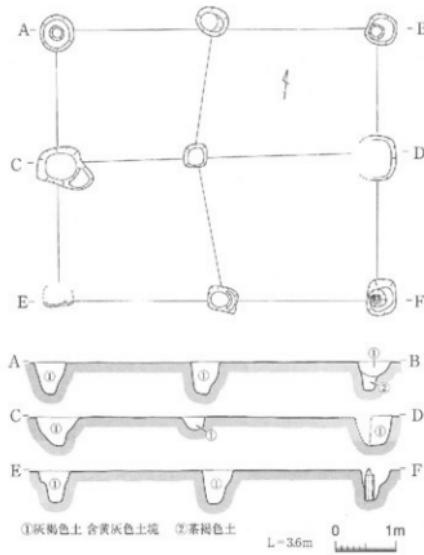


図104 建物2 実測図

近く、並存していた可能性が高い。遺構検出面は3.5m付近で、柱穴の掘り方の平面形は一辺0.5m前後の方形である。深さは検出面から0.3~0.4mで柱の大きさは柱痕跡から径0.12~0.16mである。

遺物は微細な土器片ばかりで図化できなかった。

建物4（図106）

調査区中央西端で検出された掘立柱建物である。西側が調査区外へ出るため明確でない点もあるが、桁行2間、梁間2間の柱構成と考えられる。棟方向はN-8°Wである。建物6、建物9、建物10は棟方向がほぼ共通して並んでおり、並存していたことをうかがわせる。

遺構検出面は3.7m付近で、柱穴の掘り方の平面形は一辺0.5~0.6mの方形である。柱の大きさは柱痕跡から径0.16m前後である。

遺物は微細な土器片ばかりで図化できなかった。

建物5（図107）

調査区中央東側で検出された総柱建物である。桁行3間、梁間2間の柱構成で、棟方向はE-27°-Nである。建物3や建物7と大まかな視点ではあるが、棟方向が共通し、しかも溝で区画されであることから、一連の建物群と考えられる。また、

建物4、建物6、建物9、建物10は棟方向を直交させており、同じ区画内にあるが、やや異なる配置を呈する。遺構検出面は3.6m付近で、柱穴掘り方の平面形は方形、もしくは円形である。大きさは径または一辺0.4~0.6mである。柱の大きさは柱痕跡から0.1~0.2mである。床面積は19.7m²である。

遺物は土器の小片ばかりで図化できなかった。

建物6（図108）

調査区中央西側で検出された側柱建物である。桁行3間、梁間2間の柱構成で、棟方向はほぼ南

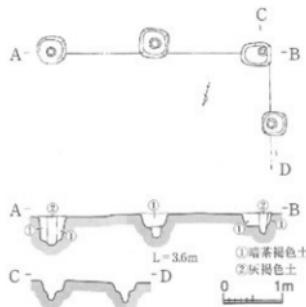


図105 建物3 実測図

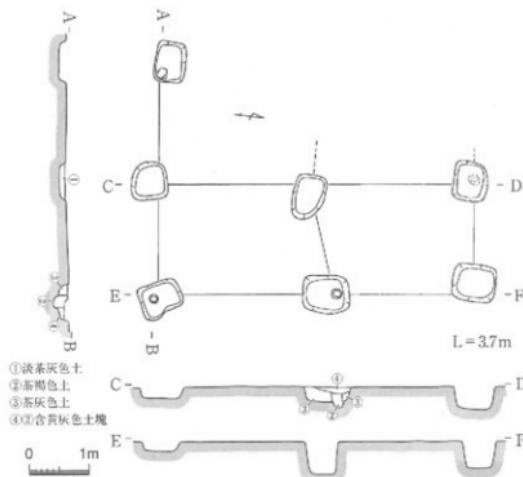


図106 建物4 実測図

北方向である。建物4、建物9、建物10とはほ棟方向が共通し、しかも溝で区画された中にあることから、一連の建物群と考えられる。遺構検出面は3.6m付近で、柱穴の平面形はややいびつなものもあるが、基本的に方形といえる。大きさは一辺0.6~0.8mである。柱の大きさは柱痕跡から径0.2m前後である。床面積は16.4m²である。

遺物は土器の小片ばかりで図化できなかつた。

建物7（図109）

調査区南東側で検出された側柱建物である。桁行3間以上、梁間1間の柱構成で、棟方向はE-10°-Nである。建物5、建物3と大体棟方向が共通し、溝で区画された中に位置することからも、一連の建物群と考えられる。遺構検出面は3.6m付近で、柱穴掘り方の平面形は一辺0.8m前後の方形である。柱の大きさは柱痕跡から径0.1~0.2mである。床面積は桁行が3間であるとすると26.3m²である。

遺物は土器の小片ばかりで図化できなかつた。

建物8（図110）

調査区南東側で検出された柱穴で、調査区内の柱列は大体東西方向であることから、一応建物の一部と考えた。遺構検出面は3.6m付近で、柱穴の平面形は一辺が0.4~0.8mの方形を呈する。建物7の建て替えか、もしくは前身建物である可能性も想定される。柱の大きさは柱痕跡から径0.2mである。

遺物は土器の小片ばかりで図化できなかつた。

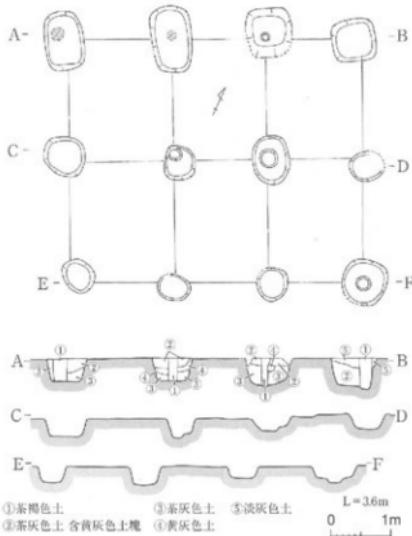


図107 建物5 実測図

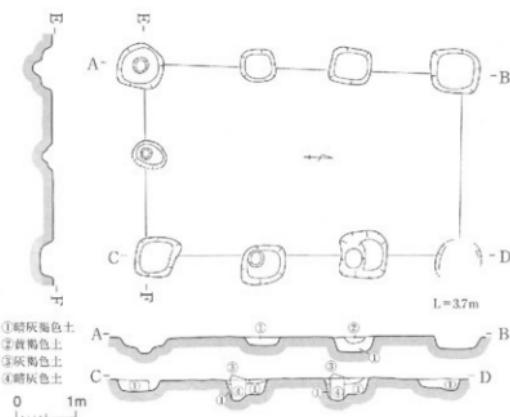


図108 建物6 実測図

建物9 (図111~113)

調査区中央付近で検出された側柱建物である。桁行3間、梁間3間の柱構成で、棟方向はN-10°Wである。建物4、建物6、建物10と棟方向が大体共通することや、ともに溝で区画された中にあることから、一連の建物群と考えられる。そのうち規模が最も大きいことから、中心建物であったといえる。遺構検出面は3.6m付近で、柱穴の平面形は一辺、もしくは径0.4~0.8mの方形ないし、円形である。柱材が残存している柱穴があり、樹種はコウヤマキ(附章参照)であった。またPAからは底面に接して、PBからは若干浮いた位置から礎板が出土した。いずれも極めて脆弱な状態であったため、樹種等の確認はできなかった。

遺物は、ほぼ完形の須恵器杯身(148)とフイゴ羽口(D1)がPCの埋土から出土した。これらから、建物9は6世紀末~7世紀初頭といえる。

建物10 (図114)

調査区南西付近で検出された側柱建物である。桁行2間、梁間4間の柱構成で、棟方向はN-10°Wである。建物4、建物6、建物10と棟方向が大体共通することや、ともに溝で区画された中にあることから、一連の建物群と考えられる。遺構検出面は3.6m付近で、柱穴の平面形は一辺0.4~0.8mの方形である。柱の大きさは柱痕跡から径0.2m前後である。南西コーナーと南コーナーの柱穴は柱が抜き取られている痕跡が明瞭である。床面積は15.1m²である。

遺物は上器の小片ばかりで図化できなかった。

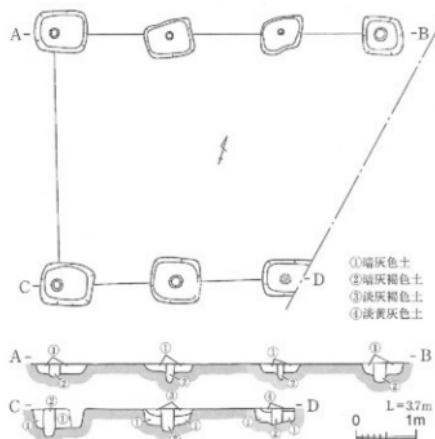


図109 建物7 実測図

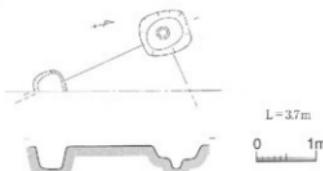


図110 建物8 実測図

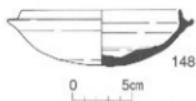


図111 建物9 出土遺物(1)

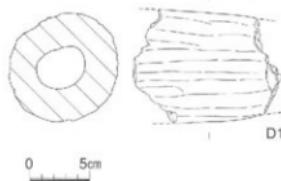
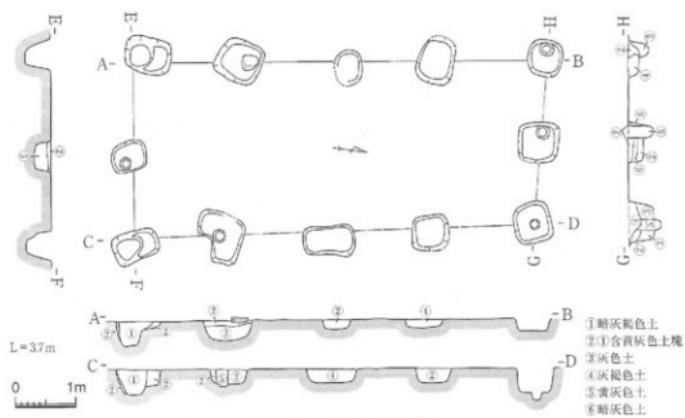
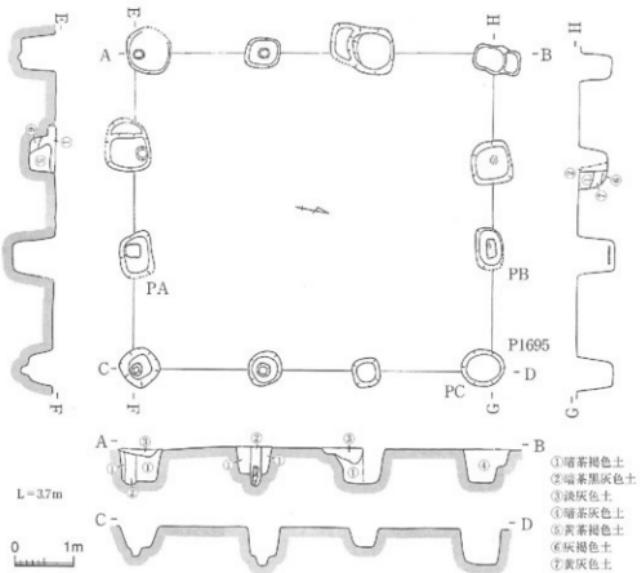


図112 建物9 出土遺物(2)



建物11（図115）

調査区南東コーナー付近で検出された総柱建物である。柱構成の全体については不明であるが、桁行、梁間ともに2間以上と推測される。遺構検出面は3.5m付近、柱穴掘り方の平面形は一辺0.6m前後の方形を呈する。柱の大きさは柱痕跡から径18~30cmである。

遺物は土器の小片ばかりで図化できなかった。

建物12（図116）

調査区南端で検出された掘立柱建物であるが、大半が調査区外へ出るため、柱穴列の可能性も高い。柱の方向性は南側にある建物11とほぼ共通しており、両建物とも、ともに溝で区画されている中に位置することから一連の建物と考えられる。遺構検出面は3.5m付近、柱穴掘り方の平面形は一辺0.5~0.6mの方形を呈する。柱の大きさは柱痕跡から径0.2m前後である。

遺物は土器の小片ばかりで図化できなかった。

建物13（図117）

調査区北東コーナー付近で検出された側柱建物である。桁行3間、梁間2間の柱構成で、棟方向はN-20°-Wである。建物5、建物7と棟方向が大体共通することや、ともに溝で区画された中に位置することから一連の建物群といえる。遺構検出面は3.6m前後、柱穴掘り方の平面形は基本的に方形で、一辺0.4~0.6mである。柱の大きさは柱痕跡から径0.2m前後といえる。床面積は15.4m²である。

遺物は土器の小片ばかりで図化できなかった。

柱穴列1（図118）

調査区北端で検出された柱穴列である。一辺0.5m前後の方形の掘り方の柱穴が4つ並ぶもので建物2とはほぼ平行していることから建物2の目隠し塙の可能性が高い。遺構検出面は3.5m付近で、柱の大きさは柱穴痕跡から径0.2m前後である。一部に抜き取られた痕跡も認められる。

遺物は土器の小片ばかりで図化できなかった。

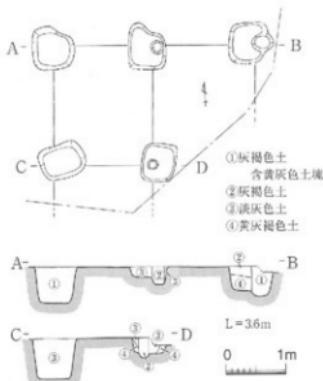


図115 建物11 実測図

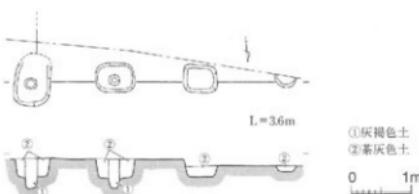


図116 建物12 実測図

柱穴列2 (図119)

調査区北端付近で検出された柱穴列である。一部を区画溝によって削平されている。造構検出面は3.6m前後で、柱の大きさは柱痕跡から径0.2m前後である。

遺物は土器の小片ばかりで図化できなかつた。

柱穴列3 (図120)

調査区中央西端で検出された柱穴列である。一辺0.5m前後の方形の掘り方の柱穴が3つ並ぶもので建物4と重なる。ただし、方向性は建物4の軸線と平行になる。造構検出面は3.7m付近で柱の大きさは柱痕跡から径0.1~0.2mである。

遺物は微細な土器片が若干出土した。

柱穴列4 (図121)

調査区中央で検出された柱穴列である。一辺0.7m前後の方形の掘り方の柱穴が4つ並ぶもので、馬を埋葬したと考えられるP1209を切っている。造構検出面は3.6m付近である。

遺物は微細な土器片が若干出土した。

柱穴列5 (図122)

調査区中央やや東寄りで検出された柱穴列である。一辺あるいは径が0.4~0.6mの方形ないし、円形の柱穴が4つ並ぶもので、豊穴住居7を切っている。造構検出面は3.6m付近で、柱の大きさは柱痕跡から径0.1~

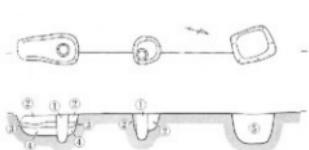


図119 柱穴列2 実測図

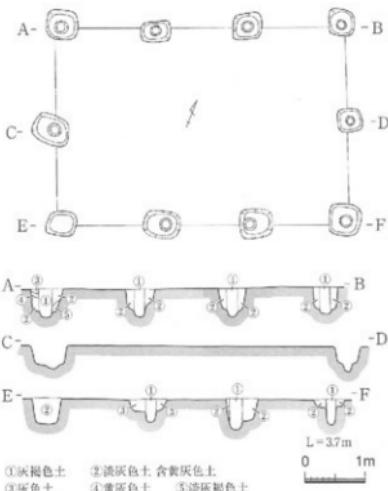


図117 建物13 実測図

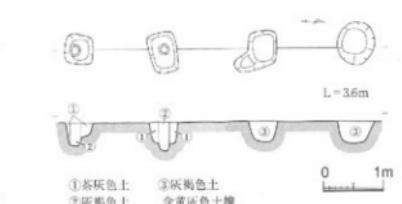


図118 柱穴列1 実測図

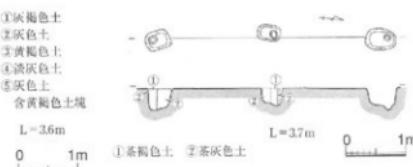


図120 柱穴列3 実測図

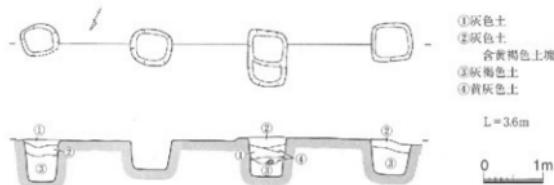


図121 柱穴列4 実測図

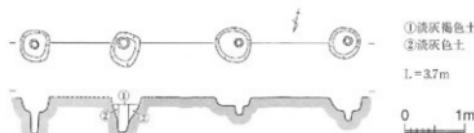


図122 柱穴列5 実測図

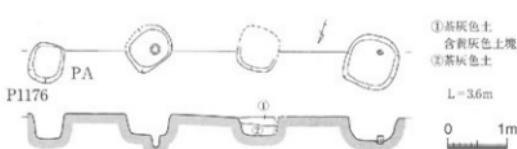


図123 柱穴列6 実測図

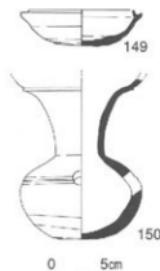


図124 柱穴列6 出土遺物

柱穴列6（図123・124）

調査区中央東寄りで検出された柱穴列である。一辺0.7m前後の方形の掘り方の柱穴が4つ並ぶもので、豊穴住居7を切っている。東端の柱穴であるPAからは須恵器の罐と杯身が出土しており、まとまった遺物の少ない柱穴列の時期を決めるための重要な手掛かりとなる。遺構検出面は3.6m付近で、柱の大きさは柱痕跡と、西端の柱穴からは柱の材が残存していたことから、径0.1m前後である。ただし残存していた材はかなり風化している

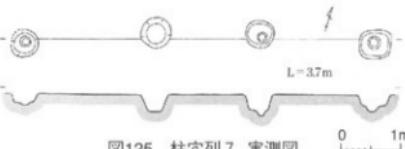


図125 柱穴列7 実測図

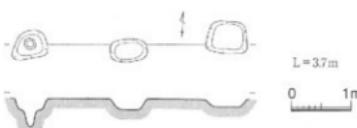


図126 柱穴列8 実測図

ものの、円形に成形されておらず、平面形が扁形であることが観察され、いわゆるみかん削材のような形状であったことがうかがえる（附章参照）。

P A から出土した須恵器の杯身（149）、足（150）から 7 世紀中葉の時期といえる。

柱穴列 7（図125）

調査区中央で検出された柱穴列である。一辺もしくは径 0.6~0.7m の方形ないし円形の掘り方の柱穴が 4 つ並ぶもので、建物 9 と重なる。遺構検出面は 3.6m 付近で、柱の大きさは柱痕跡から径 0.2m 前後である。

遺物は微細な土器片が若干出土した。

柱穴列 8（図126）

調査区中央西寄りで検出された柱穴列である。一辺 0.6~0.7m の方形の掘り方の柱穴が 3 つ並ぶもので、建物 9 の南側に付属する目隠し塀である可能性が高い。遺構検出面は 3.6m 付近で、柱の大きさは柱痕跡から径 0.2m 前後である。

遺物は微細な土器片が若干出土した。

柱穴列 9（図127）

調査区中央東端で検出された柱穴列である。一辺 0.4m 前後の方形の掘り方の柱穴が 3 つ並ぶもので、建物 7 と重なる位置関係にある。遺構検出面は 3.6m 付近で、柱の大きさは柱痕跡から径 0.1m 前後である。

遺物は微細な土器片が若干出土した。

橋状遺構（図128）

調査区南西コーナー付近で検出された柱穴列である。建物群を区画している溝のなかで、最も規模の大きい溝 10 の肩部で検出されたことや、正面がちょうど区画の境に相当することから、区画の間に設定された通路に伴う橋の橋脚と推測された。橋の幅は西側が 1.2m、東側が 1m、長さは 1.8m で、4 本の柱で支える。柱の径は 0.2m 前後で、深さは検出面から 0.1~0.4m である。

遺物は微細な土器片が若干出土した。

P 1110（図129・130）

調査区中央東端で検出された土壤であるが、断面形をみてみると、弧状、あるいは L 字形に曲がる溝状遺構である可能性も多い。土壤とすると、長さが 10.2m 以上、幅 3.7m 以上の規模で、溝状遺

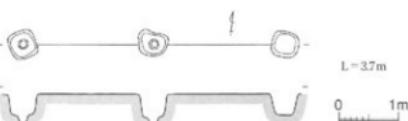


図127 柱穴列 9 実測図

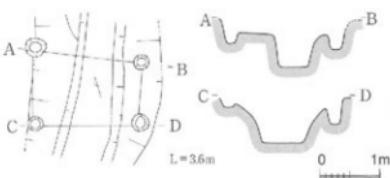


図128 橋状遺構 実測図



図129 P1110 実測図

構とすると、幅1.2~3.3mで部分的に深くなっている形状といえる。遺構検出面は3.6m付近で、最深部の深さは検出面から0.3mである。

遺物は、須恵器の杯蓋(151~154)、有蓋高杯の蓋(155)、杯身(156)、高杯(157)、甕(158)、鉢(159)、土師器の甕(161)、製塩土器(160)がある。これらから当遺構の時期は7世紀前葉といえる。

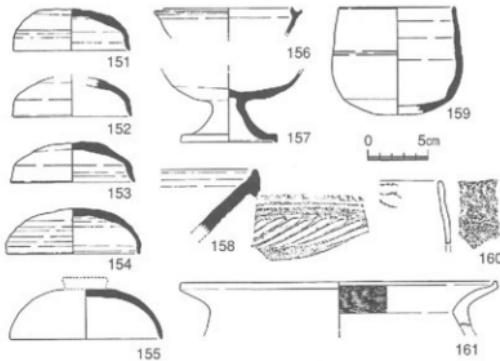


図130 P1110 出土遺物

P1209 (図131・132)

調査区中央やや北寄りで検出された土壤である。北端をわずかに削平されている以外は、全形を検出することができた。長さ7.0m前後、幅3.0mの不整形な形状を呈している。部分的には溝状遺構が重複しているような状況でもあった。しかし埋土的、および検出時の検討では、複数の遺構が重複しているとは認められなか

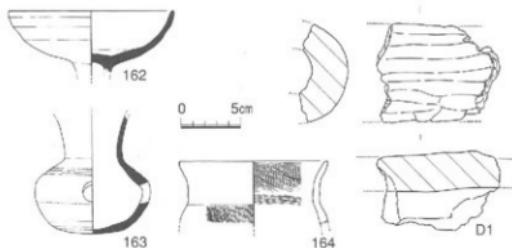


図131 P1209 出土遺物

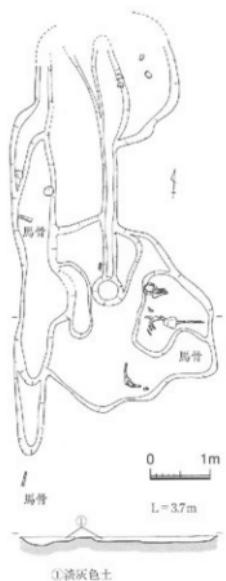


図132 P1209 実測図

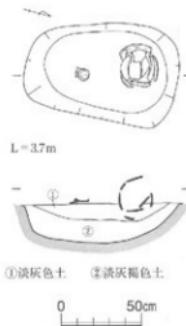


図133 P1395 実測図

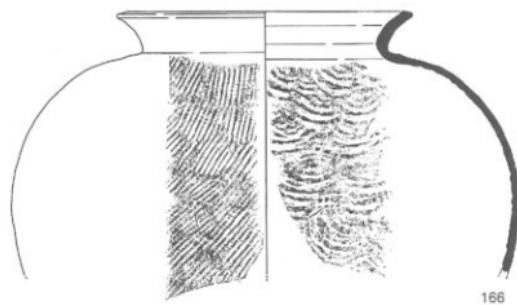


図134 P1395 出土遺物

った。遺構検出面は3.6m付近で、最深部の深さは検出面から0.12mである。遺構南端は長さ3.0m、幅2.5mに平面形が袋状に広がっており、そこに馬の骨が一体分横倒しにした状態で出土した。出土状況を見る限り、馬は埋葬もしくは意識的に埋められたことは明らかで、前足の上面には長さが0.2mほどの角礫がのせてあった。周辺にある遺構との関係から、比較的浅い穴を掘って馬を埋納し、その上にかなりの盛り土をしていったことがうかがわれる。馬の骨はこの部分以外でも埋土や周辺から散在的に出土している。

遺物は馬の骨に直接伴った出土状況ではなかったが、埋土から須恵器高杯(162)、土師器甕(164)、ナイゴ羽口(D1)が出土した。これらから当遺構の時期は6世紀後半～7世紀初頭といえる。

P1395 (図133・134)

調査区中央付近で検出された土壙で、建物9と重なる位置関係にある。長さ0.9m、幅0.6mの長楕円形、もしくは隅丸方形の平面形を呈する。遺構検出面は3.6m付近であるが、埋土に含まれていた須恵器の甕は、かなり上面から検出されていた。断面形は台形で、埋土は2層あり、最深部は検出面から0.22mである。遺物は全て①層から出土した。

遺物は須恵器甕(166)が口縁部を下に向けて検出され、底部周辺以外は完形であることから、本来は完形の甕をふせた状態で埋納していた可能性が高い。そのほか須恵器杯身(165)も出土した。これからから、当遺構の時期は7世紀中葉～後半といえる。

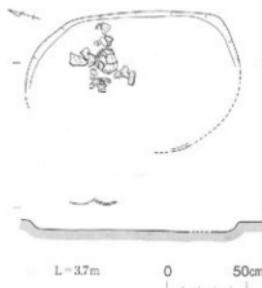


図135 P1406 実測図



図137 P1439 実測図

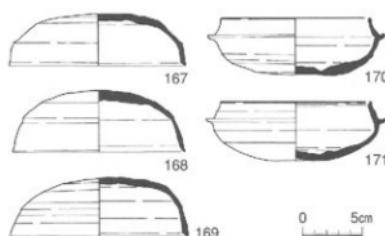


図136 P1406 出土遺物

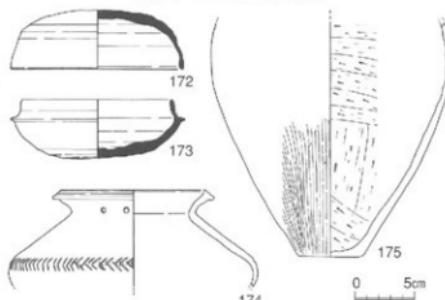


図138 P1439 出土遺物

P1406 (図135・136)

調査区中央付近で検出された土壙である。建物9の柱穴によって部分的に削平を受けており、長さ1.3m、幅0.9mの長楕円形を呈する平面形で、断面は台形である。遺構検出面は3.6m前後、最深部は検出面から0.06mである。遺構内北側では、遺構底面よりも0.14mほど浮いた位置で、須恵器の杯が正置して重ねられた状態で出土した。須恵器以外の遺物は含まれていないことから、意識的に埋納されたことがうかがえる。時期は6世紀中葉である。

P1439 (図137・138)

調査区中央西側で検出された土壙である。建物9の西側に接する位置にあるが、両者は時期的には差がある。長さ0.4m、幅0.35mの長楕円形を呈する平面形で、断面は台形である。遺物は3.7m前後から検出していったが、遺構の全形が検出できたのは3.6m前後である。最深部は検出面から0.03mほどである。遺構内中央やや西寄りで須恵器の杯身・蓋が正置の状態で出土した。須恵器以外は下層からの混入と考えられる弥生土器が出土したのみであり、意識的に埋納されたことがうかがえる。時期は6世紀中葉である。

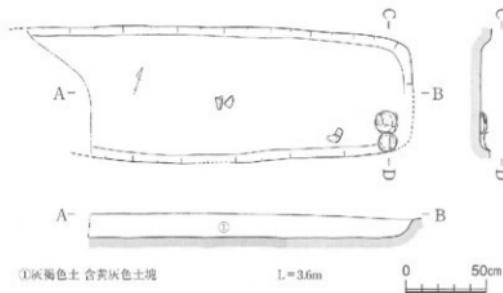


図139 P1447 実測図

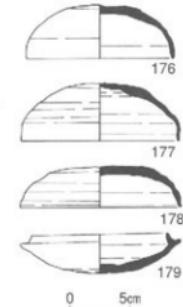


図140 P1447 出土遺物

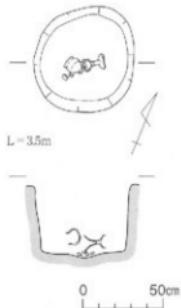


図141 P1666 実測図

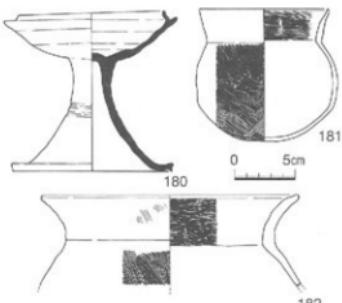


図142 P1666 出土遺物